

001709-000-2

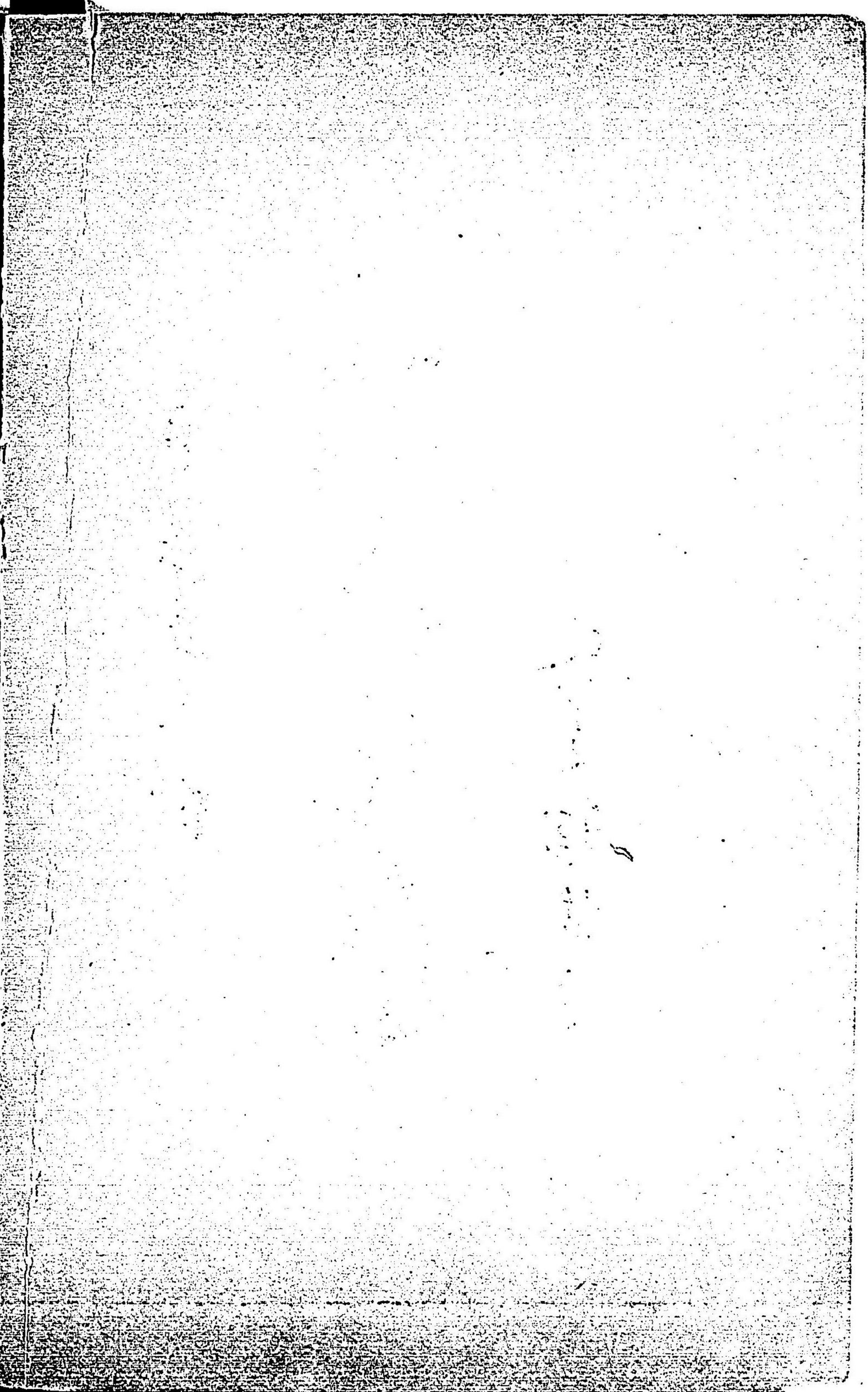
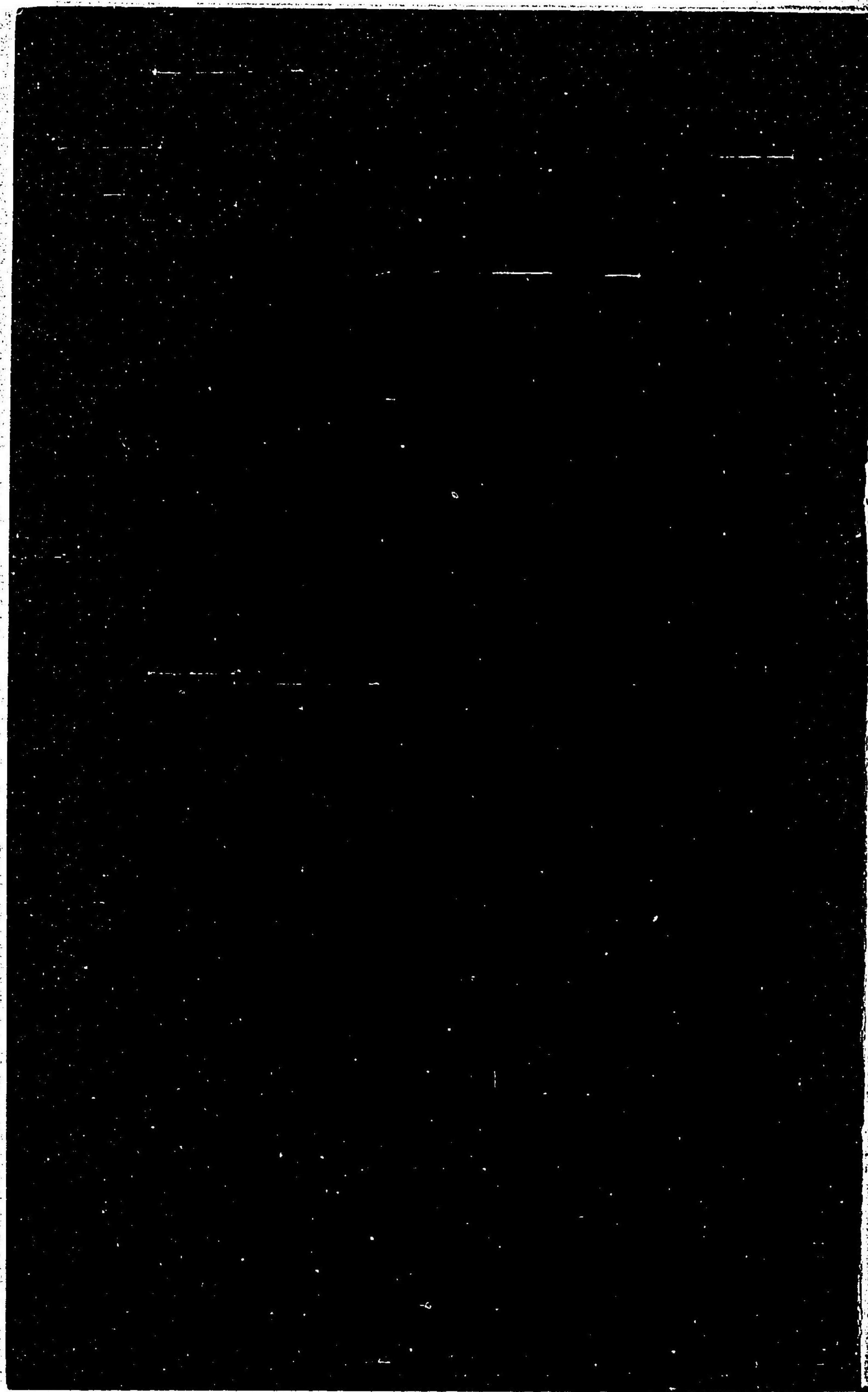
特20-637

赤穂義士

中島 董畝/著

M45

ACB-4435



勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深
厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美
ヲ濟セルハ此ニ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存
ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己
ヲ持シ博愛ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ
一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ
是レ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ
遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵テス
ヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣
民ト俱ニ拳々服膺シテ成其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月二十日

御名 御璽

45. 1. 15

内交

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益ク國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス願ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益ク更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名 御璽

明治四十一年十月十三日

勅語

大石良雄

汝良雄等固執主從之義復仇死于

法百世之下使人感奮興起

朕深嘉賞焉今幸東京因遣使權辨

事藤原獻弔汝等之墓且賜金幣

宣 明治元年十一月五日

赤穂義士目次

松の廊下……………一

連判状……………十九

張拔石……………三十八

臥薪嘗膽……………五十六

千草の花……………七十四

雪の曙……………九十八

萬山不重……………百十八

目次(終)

赤穂義士

法學士 中島 堇 畝 著

松の廊下

布引のおちたぎつ瀧の響に、驚きやすい旅寝の夢をさ
まされて、須磨や明石の磯づたひ路を南播磨にとつてま
りますと名さへやさしい千草川の長流に沿つて、赤穂
といふ町があります。

此町が懐かしい四十七義士の、搖籃の生れ故郷であり
まして、あたりの山容水態は、松籟濤聲にとよせて、當年

のふる物語を物語つてゐるではあるまいかといふ心地のせられるのはひとしなみにわれもひともおんなじてありませう。

淀に浮かぶうたかたのかつ消えかつむすぶまゝに流れて息まぬ徳川の年の早瀬も次第にうつろひ行きていつしか五代將軍綱吉公の元祿時代となりました。

治にゐて亂を忘れずと往昔の賢いお方が仰せられてあります。治にゐては亂を忘れるが世態の常套であります。何しろ泰平が百年足らずも糸瓜の行列の長々しく續いたこととありますから弓は袋にをさめられ槍は鞘にしまひ込まれて虫干のをりでもなければ滅多に浮世

の風にお目見得をすることもない。武士は劍術柔道のお稽古を餘所にして朝となく夕といはず化粧粉黛にはかり浮身を糞し侍の魂ともいはれる大小さへ造作にも嗜好を凝らしても抜けは玉散る氷の刃は猫も御免と頭振をするやうなしなびた赤鯛となつてゐるといふ始末。華僭淫蕩のうち元祿も十四の齡を重ねて世はなほ二月の春まだきに鶯は谷の樞をたちいで、梅氣早い梅の花がくれにさゝなきをめる頃となりました。

徳川家では毎年正月になりますと京都の朝廷に澤山の金銀幣帛を献上いたして新玉の御壽をまをしあげるのが例でありました。その返禮として朝廷からも態

々江戸に勅使をお遣はしになります。わけでも今年、將軍綱吉公の御母君桂昌院様に、一位の御位を賜はるといふので、傳奏柳原資廉卿、高野保春卿、清閑寺熙定卿の三方が、東山天皇の勅使、靈元上皇の院使として、關東に下向せられるのであります。そこで御老中は協議の上、播州赤穂の城主、淺野内匠頭長矩と、豫州吉田の城主、伊達左京亮宗春とを、殿中にめして御饗應掛を仰付けました。内匠頭はまだ三十五歳の若輩であります。朝廷や幕府の典禮にも嫻はないので、一應御辭退をいたしました。が、誰とてかゝる職務を通曉いてゐるものはない。萬事は高家吉良、上野介義央の指圖をうけよ。

との重ねての命令、いまは固辭む途もなく、謹んでお受けを致しました。

所が上野介役は高家の筆頭位は四位の少將、齡は六十の坂を超してゐながらも、大變な我利我利老爺で、慾心は奴胤のよりに突張つてゐる。寵臣柳澤保明の腰巾着となつて、それを後盾に、貪婪の角をふりたて、ばかりをります。

何しろ四十餘年もの長い星霜幕府にをりまして、儀式作法に熟練した古狸でありますから、此人に意地悪くされると、蟹の肢を斷ちきられたより、大切なお役目が勤まりませぬから、毎年の接伴役は、止むなく金銀珠玉錦繡の

澤山な賄賂をいたしまして辛とのこと、首尾よくお役目を果して来たといふ始末であります。

この度も聞けば赤穂はなかなかの金持大名であるとのこと、うまい餌食にありついたは冥加の至だ。いまに山程賄賂を運んで来るに相違はあるまいと、獨笑壺に入つて、皺苦茶の頸を鶴のように長くさしのべて待つて居りました。

一方内匠頭は江戸家老に命を含めて、上野介は名たる貪慾ものとの評判、進物等に差支がないより、充分にとりはからへとまをしつけました。

所が江戸家老の藤井又左衛門、安井彦右衛門の兩名は

存外の各齋家でありまして、お負に滅多な進物をするは、却無禮にあたりはしまひかと考へまして、伊達家では加賀絹數卷、黄金百枚を贈つたのにひきかへて、鯉節一連しか贈りませぬ。

そこで上野介は、おのれ不届至極の内匠頭、奴人を馬鹿にするにも程がある、接伴の儀式作法にも、白い所は黒といふりに、鶺鴒の嘴のくひ違つた指圖ばかりして、美事役目を失敗らせて、腹癒やせをしてやらうと、そこが小人の淺間しい性根をあらはしてまゐりました。執念を蛇に見込まれた内匠頭こそ、悲惨なものであります。

頃は三月十一日、花のお江戸は、東臺墨堤櫻の雲の十重

二十重にとざゝれて、物見高い都の人は瓢箪に美酒をつめ般若面や潮吹面おもひおもひの假装姿、今日は飛鳥あすは小金井と右頂天になつてゐる最中に、勅使は天さかる鄙の長路を、恙なう江戸表に到着して龍口傳奏屋敷に入りました。

浅野家では山海の珍味を今戸の八百膳にまをしつけて、今や遅しと待ちかまへてをりますと、上野介は賄賂のとれぬ腹癒やせに、

今日は勅使は精進日のように洩れ承つてをるから、魚鳥の饗應は控えられたがよからうと、まをしてまゐりました。

所がお留守居役の堀部安兵衛武庸は、高田の馬場に叔父の仇討をして、武名を天下に轟かした程の、智勇絶倫の士でありますから、これにも何か仔細があるに相違ないと、不審の眉をよせまして、兎に角精進料理をも用意して置いて、更に伊達家へ使者を以問ひ合はせますと、果して上野介の意地悪根性から出た浮草の根なし虚ごととわかりました。

勅使は一夜の休息をいたされまして、翌十二日には御登城大御心を傳奏して、後芝の増上寺に参詣せられるのが恒例であります。

浅野家では、前以宿坊の疊と壁とは如何に致したものの

てあらうか上野介に問ひ合はせますと、
繕つて置けば結構

との返答でありますから其儘にうち過ごして置きますと伊達家では何時の間にか立派に塗り易へ敷き易へてあります。

これを聞いた浅野家は周章狼狽の大騒狸老爺にまた騙されたと早速職人を驅り集めてまゐりまして高張提灯を白晝の如くに點け一夜のうちに普光院の四壁青疊を新規にしなければならぬといふ破目に立到りました。

翌十三日は殿中において能樂の御催があります。老中

はじめ一同は大禮服衣冠束帯して登城すべきであるのは勿論のこととあります。それを上野介は内匠頭に長袴の略服でよいとの指圖であります。しかし最早二回も手を焼いた内匠頭はその手は桑名の焼蛤と素袍大紋を用意して狭箱に入れて持たせてまゐりましたから衆人列座のうちによりやく禮式を保つとが出来ました。

おのれ面憎き上野介一刀兩斷はやすけれど幕府の掟として殿中において鯉口三寸をくつろげたものは領地没收御家斷絶でありますから二度ならず三度まで屈辱を受けましても内匠頭は一藩離散の悲運を胸におもひ合はせ男子の涕を凝乎と堪へて堪忍袋の緒をひきしめ

こゝまでは漕ぎつけてまゐりました。
 ところが十四日は、御白書院において、將軍が御刺答の
 當日であります。朝まだきから、御三家、御三卿、御老中、若年
 寄から、譜代大名皆大禮服を着けまして、綺羅星の如く控
 えてをります。

霎時すると、御老中から連名の御奉書といふものが出
 ました。これも奉書の紙へ書いた回章であります。

そこで内匠頭は、松の御廊下において、上野介に向ひま
 して、慇懃に両手をつかへ、

承りますれば、唯今連名の奉書が出たとまをすこと、拙
 者の名前もこれある由に存ずれば、拜見致したいもので



松の廊下

ござる。

と、まをしますと、上野介は、

これも其許などに拜見をゆるすべき軽いものではない

い

と、鷹揚に奉書を懐中に入れました。そこで内匠頭は大紋の裾をおさへて、二言三言押問答をいたしました。が、要領を得ませぬ。そのうち上野介は、持ちをる中啓て抑へられた。大紋の袖を拂はうとして、誤つて内匠頭の横面をした、かに叩きました。

積もつた忿怒は、恰逆巻きかへる濁浪が、堤防を潰ぶるより、一時に簇々とおこつてまわりました。なので、内匠頭は

遂に腰間帯ぶるところの備前長光の名刀を抜き放ち、

おのれ上野覺悟せよ

と、電光石火、五體も微塵と斬りつけました。

ところが、生憎烏帽子の鐵骨に、刃はかちりと支へられまして、悪運強い上野介は、聊薄手を負つたばかりであります。

討損じたか残念と、かへす刀に肩先目蒐けて、斬込みました。が、深手といふ程にまわりませぬ。

此時はやく桂昌院様御留守居役として、松の御廊下に控えてをりました。梶川與三兵衛といふ、大力無雙の男、背面から内匠頭を抱き止めました。ので、流星の光底に古狸

を逸して無限の遺恨を千載の下にのこすことゝなりま
した。

殿中の刃傷といふので、沖つしほぎゐの一時に捲き崩
れるよりな上を下への大騒動であります。何をいふにも
大切な祝日に淋漓たる血汐を逃らせたのであります。か
ら綱吉公の激怒は一通ではありませぬ。早速御目付多門
傳八郎をして喧嘩の次第を検べさせ、結局

内匠頭は私怨をもつて場所柄をも辨へず、理不盡の舉
動に及んだのは不敬至極である。城地五萬三千石を召上
げ追つて切腹仰付け、上野介は神妙至極なり。治療静養
を充分にせよ

との上意を傳へられました。

幕府の禁令をやぶつた罪科があるとはいへ、清廉の士
に重い刑罰を加へられ、姦邪の徒に厚い稱讃を與へられ
るのは、そこが空蟬の人の世とはいへ、誰か悲憤の涙を濺
がないものがありませう。

さて内匠頭は素袍大紋を麻上下に着換へ、網乗物に乗
せられました。田村右京大夫の御邸にお預けとなり、つい
で庭前に於いて切腹を致されました。その時に、

おそれながら介錯は拙者差料で頼みたい
と申入れました。これは内匠頭の差料は、備前長光の鑿
を斷つほどの業物であるにも拘らず、赤鯛の鈍刀であつ

たために斬損ねをしたといふような評判を後生にたてられまいとの立派な武士の心掛の一節であります。つぎに小菊の懐紙を取出しまして、薄墨の走書に、

風こそふ花よりもまたわれはなほ

春の名残をいかにとやせむ

と、一首の辭世を認められ、可惜壯年の命運を暮春の夕風の誘ふまゝに委せました。

實に古の歌にも詠んだように、散る花のなくにしとまるものならば、赤穂の忠臣義士は鶯兒に劣らぬどころか、天地もさげよと哭いたてありませう。赤穂藩上下の遺恨血涙を餘所にして、散り行く花はさらさら、遠慮容赦の

ないこそ悲しいことの極ではありませぬか。

連判状

刃傷の當日、主君の扈從をしてゐた片岡源五右衛門高房は、兇變の報をきくが疾いか馬に一鞭あて、鐵砲洲の御邸に馳せつけ、委細は早見藤左衛門、萱野三平をして、赤穂表に注進を致させ、をり返して、田村右京大夫の邸宅に出頭して、今はの訣別を、餘所ながらまを上げたいと切なる願に及びました。

武士の情を知るものは、誰か固辭むことが出来やう、早速庭上椽先に、遠目ながら面謁をゆるされました。千萬無

量の忠臣の心意はさることながら内匠頭もまた真葛の下葉におく露の滋き遺恨の血涙をはらひもにせず、よく尋ねてくれた

と仰せられたばかり源五右衛門は片言隻語もまをしませぬが、

主君よ心静に大往生あれ。たとひ薪に伏し膽を嘗め、身に黒漆を塗りつけても、不俱戴天の主君の仇讎いかて報わて果つべきか

と金石かたき決心の色を眉宇の間に仄かせました。

さて其日の夕まぐれ生ぬるい夜風に誘はれて原惣右衛門大石瀬左衛門の兩名は早駕籠にうち乗つて主君切

腹の逐一を國元に報告するために出發いたしました。早駕籠といふのは番蜻蛉のように捧を結ひつけて、擔ぐ駕籠でありまして、これに乗るのは命懸の仕事であります。兩名は彌生半の霄まだき月下に都門を立ち出て、玉鉾の鄙の長路の百五十里をたゞの五日雲烟眼を過ぐるよとおもふ間に乗り過ぎて、恙なう赤穂表に到着いたしました。

これより先赤穂城の正門の廂裏に何時ともなく小蜂が巢をしつらへました。が如何いふ機會かある日拊指程の大蜂が一疋、轟然に飛んでまゐりまして其巢に衝突したかとおもふと鎬をけづつての大戦争が始まりました。

城代家老大石内藏助良雄は沈勇大度の立派な武士かねて天文兵學を通曉いて居りますから、これは何か主家に容易ならぬ兇禍の前徴ではあるまいかと、獨眉を蹙めて心痛してをりますと果して主君割腹主家斷絶一藩離散の大變な兇報であります。城中といはず城下といはず顛覆るよりな大騒泣くもあれば狂ふもあり喚くもあり、眼も當てられぬ始末となりました。

大石内藏助良雄はかの大蜈蚣を退治して勇名を轟かした、俵藤太秀郷の末裔であります。大石家は代々近江の大石庄に居住して、足利氏、豊臣氏などに仕官してをりましたが、曾祖父良勝の時故國を逐電して常陸の笠間に放

浪つてまゐりまして、淺野采女正長重につかへました。其後戦功によつて家老職に任ぜられ、千五百石の高祿を頂戴いたしました。

淺野家は内匠頭長直の時播州赤穂にお國替となりましたので、主君に従つて赤穂に引移つて、こゝに内藏助良雄が産湯を使つたのであります。

内藏助良雄は嚴父を權内良昭といひ、母堂は備前の家老池田出羽守の娘であります。劍道は奥村無我といふ先生に稽古して、いたゞいて免許を得てをり、儒學は伊藤仁齋先生の秘藏弟子であります。殊に兵法は山鹿流軍學ををさめ、六韜三畧の蒞奥にたちいつてをりました。

素行先生は天下の大學者であります。年齢三十にして、既に經學兵學ゆき渡らない隅もありません。長直侯も、夙から先生の董陶を受けてをりました。が遂に賓師の禮儀をもつて、赤穂に招聘をいたしました。して藩中のものに教育を授けて貰ひました。

其後先生は、また江戸に出てられて、學塾をひらきました。が其評判は實に素晴らしいもの。瞬く間に八百八町になりひゞきは、諸侯より下は士民に至るまで、お弟子の數は三千人にも及びました。

しかるに、いつも社會に害毒を流すのは、小人輩であります。當時看板だけ儒者といはれる學者どもは、生先の名

聲に妬をおこしまして、根なし萍の讒言ばかりいたしたものであります。から先生は遂に寛文六年に江戸を放逐せられました。

そこで長直侯は先生監督といふ名義で再先生を招聘して、賓客として待遇いたしました。

先生赤穂にゐますこと、春秋二十年の長日月に及びました。が長直侯の恩誼に感じまして、一意専心に仁義を訓へ、兵法を説いて、赤穂藩士を薰陶いたされました。から一旦君家の事變に當りました。しては忠肝義膽の四十七士を出したのであります。

皆さん松林でなければ松茸が生えた例證がありません。

ぬ麗水崑岡でこそはじめて金玉が産するのであります。教育の力は實に偉大なものではありますませぬか。

内藏助は經學兵法に練達してゐたのみならず書畫にも巧にまた詩歌にも長けてをりました。

かほどの器量を有つてをりながらお世辭もなければ愛嬌もありませぬ。能ある鷹は爪を隠すとはよくいつた諺であります。それで誰とて内藏助の智謀沈毅を知るものもない。主君の御覺もあまり愛たくありませんだ。

鍍金の時計や指環をも眞物と見せたいといふが人情であるのに、銜ひもせず誇りもせず忠心を努めて、寡言に沈着いてゐるといふのは見上げた英傑でなければ出来

ませぬ。山雀や四十雀のよりに、ひよこひよこ飛びまはつて如才のない奴共は大義の爲に身命を放擲つといふよりな場合が來ると、青菜に鹽の顛々ものとなつてしり込をしてしまひます。實に人生の艱難曲折は、偉人傑士の試金石ともいふべきものであります。

さて内藏助は前後二回の早駕籠で主君兇變の大略を知ることが出来ましたが、藩中鼎の沸きかへるよりな騷擾に引きかへて更に慌てふため、氣色も見えませぬ。

先家臣三百七十餘名を城中の大廣間に集へまして使臣口上の趣を披露してのち、徐に口をひらいていふには、幕府の禁令を犯して殿中に刀刃の鞘を拂つたのは、主

君の御落度たるは勿論のことなれど君辱めらるれば臣死すとは立派な格言である。拙者も諸君も忠死は固より期する所であるが、たゞ武夫たるものは死處を擇ぶのが肝要で、犬死の如きは生きるに増さる耻である。今日は身分の上下等を論ふ場合でない。各腹藏なく心懐に存する意見を陳べられよ。

と、理義分明な言の葉に、諸士の意見は區々であります。或は殉死が臣下の本分であると唱へるものもあれば、なに今から直に押懸けて上野介の白髪首をひき抜くが宜いと、鼻息の格別荒いものもある。或は御城請取の幕軍に反抗し、孤城をもつて天下の大兵をひきうけ、潔く討死す

るが立派であるといふものもあります。議論は刈菰の亂れに亂れて、何時果つべしとも思はれませぬ。

しかし殿中の刃傷以降、閉門を仰付けられてゐる内匠頭の舍弟大學殿に、改めて跡目相續の有難い命令でも下りますれば、御家断絶、一家離散の悲惨な憂目に遭はずに済むのでありますから、及ばずながら御城請取の上使たる御目付衆まで、一應嘆願いたした方が宜からうと、内藏助は一同の同意を得まして、多川月岡の兩名に旨を含めて、江戸表に發足せしめました。

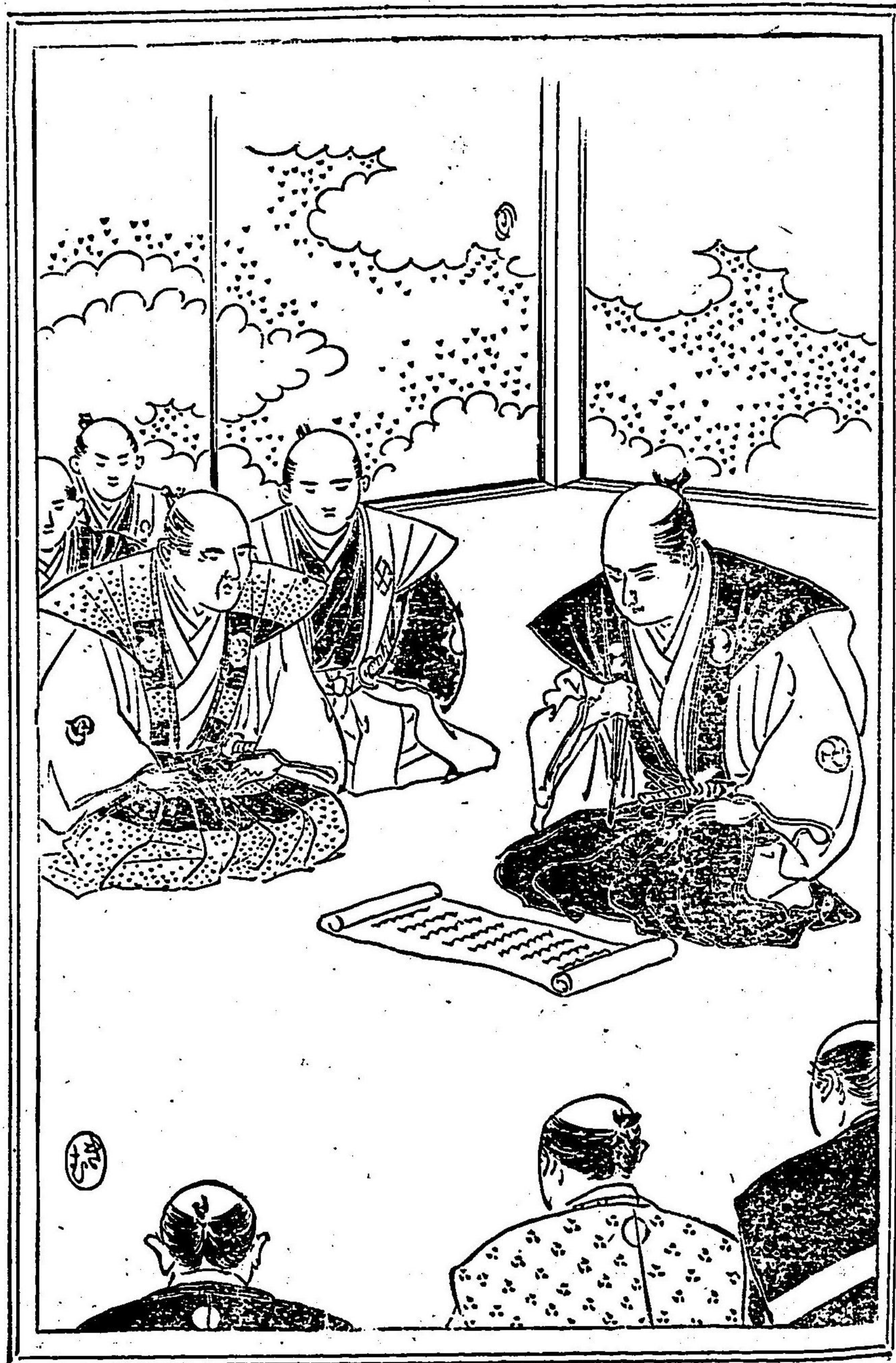
主家存亡の危急の場合にも拘はらず、忠魂義膽に緩があつたと見え、蛸輪の遅遅と東海道を辿つてまゐりまし

たので、上使は最早出發の跡、内藏助の心盡も、水の泡となつてしまひました。

こゝに内藏助は、一同を集めまして、

諸君城を枕に討死するも、立派な武士の本分であるに相違はないが、殘黨の微力をもつては、金鐵かたき忠魂があるとはいへ、僅半日も天下の兵馬を支へることは出来ぬ。却世の物笑の種となるばかりである。因つて一同殉死の覺悟で、親族故舊にも訣別の水盃をして、明日出なほつて來て貰ひたいと、まをしました。

心の花は風がなくなつても、うつろひ易く、飛鳥川昨日の淵は今日の瀬と變るは、浮世の人情であります。かうなると、



生命の惜しい連中ばかり明日になつて決死の覺悟で集まつたものはたゞ六十一人しかありませぬ。

そこで内藏助は殉死の宣誓をするとして懷中から連判状をとり出して眞魁けて自分の名を署き小柄を以薬指を傷けて血判をいたしました。

つゞいて一同の者もわれおくれじと血判をする中に堀部安兵衛奥田孫太夫高田群兵衛片岡源五右衛門磯貝十郎左衛門は夙から復讐の決心をいたしまして江戸から遙々と馳せつけたのでありますから血判をすること承知しませぬ殊に片岡と磯貝とは亡君の遺骸を高輪萬松山泉岳寺へおくつた時墓前で鬚をきつて亡君に御

誓をいたしてまゐつたのでありますから更更同意は出来ませぬ。

内藏助も茲に始めて殉死の宣誓といつたのは實は一味徒黨の誠心の存否を確める手段であつたのだ自分ももとより復讐が本意である

と告げました。

一同は今更ながら城代の深い謀遠い慮に感服いたしましたして身を碎き骨を粉にしても亡君の遺志をついで上野介を恨の刃に殮してのち潔き最後を遂げやうと血涙を濺いで盟を締びました。

次に内藏助は會計整理にとりかゝりました。まづ領内に流通して居つた紙幣を銀貨に引換へて庶民を安堵させ菩提寺には跡とふ法の燈火料として若干の財産を寄附し亡君の未亡人瑤泉院にも相當の御用度料を差上げて後殘金をば藩中の諸士身分の上下を問はず平分しやうといひ出しました。

忠義と貪慾とは反比例をしてゐるのか、殉死の宣誓の折は後込をした連中も軍用金の分配と聞いては、すてはおけぬと烏も鷺も大勢集まつてまゐりました。

中にも大野九郎兵衛といふ老爺は、内藏助と共に家老の立派な身分普通ならば亡君の恩顧に感激して、生命を

鴻毛の輕に比し、忠臣の魁とならなければならぬのに、利慾の心が奴胤のやうに突張つてをるものでありますから。

頭割とは甚怪しからぬ、祿高に比例して分配するのが公平至極と存ずる。

と、さも道理らしく主張しました。これには貪慾主義の一味も多かつたので、遂に祿高分配のことゝなりましたが、それでも九郎兵衛はなほ物足りない。不満足の氣まぐらかしに、

内藏助は勘定奉行の岡島八十右衛門と腹を合せて、軍用金を胡麻化したに相違ない。

と、突飛な悪口をいひ出しました壁に耳あり障子に目ある世の中この悪口が岡島に知れたから堪りませぬおのれ不届至極の老耄の貪慾爺ことによつたら一刀あびせて呉れやうと意氣込悽まじく九郎兵衛の玄關に衝立ちました。

九郎兵衛は留守を使つて辛と虎口を遁れたおもひをしたが岡島がなほ訪問しさうで怖くて堪りませぬから其晩宵闇に紛れ家財荷物もそこくに赤穂から逐電いたしました。が、餘り周章たものだから女兒を一人残して逃亡せました。内藏助は可愛相なことであると、側陰の心をおこしまして早速ひきとつて立派に育上げたとい

ふこととであります。血あり涙ある武夫こそ眞個の武夫ではありませぬか。

女兒は残しても金銀は残さず、百兩二百兩と町内の豪商に預けてまゐりました。内藏助は其金銀に封印をして一切渡してはならぬと命令を下して置きました。

そのうちに九郎兵衛何處よりか竊に町内にやつてまゐりまして、三百兩ばかり持逃をいたしました。日頃九郎兵衛の處置を憎んでゐた若者ども、素破此時と早速韋駄天走に追ひかけて行き國境でその襟頸を捕らまへて金を渡すか命を譲るか、と手詰の談判に及びましたので堪りませぬ九郎兵衛金を放擲して這々の態で逃げ延びま

した。
 後京大阪の邊を放浪つてをりましたが、四十七士の目も綾な復讐をした後は、誰とて隻語をかける者もありませぬ。おそらく何處かて乞食同前の野垂死をしたこととてありませう。忠孝節義の尊さは、これでも分ります。

張拔石

一樹の蔭、一河の流も、この世ならぬ契であります。つひかりそめの旅泊さへ、さよなら御機嫌やうといはれる時は、うら淋しい氣持がするものを、況して赤穂城は淺野長直侯が、常州笠間から國替の後幕府に強つての懇請をし

て、築き成した名城であります。東に鷹取峠、西に猪池山を負ひ、おのづからなる天塹地濠に形勢の利をしめてゐます。それを見す、看す、他手に委さなければならぬのであります。さから藩中浪士の心腸は、さぞかし扶られるようであります。ありましたらう。

儲御城請取の上使は、藩中の悲愁を餘所にして、赤穂をさして乗り込んでまゐります。何しろ山鹿流兵學の達人ともいはれる大石内藏助であれば、容易に其城を明渡すこともあるまいと、近藤の諸大名も各隊伍を率ゐて國境までつめ懸け、旗標鼓角の陣立雄々しく軍馬に秣ひ、矢筈を列ねて待つて居りました。

赤穂の藩士に萩原平助といふ裕福のものがありまして大砲などを所有して居りましたが今度開城の見届として軍兵を統率して赤穂表につめ懸けた播州龍野の城主脇坂淡路守に巨額の利得をして賣却したといふこととてあります。

弓筈のさわぎ飛ぶ火の煙よし籠城はしないまでも主家の兇變を好機會に千萬無量の愁嘆のなかで金儲をしやうとは見下げ果てた心底ではありませぬか。

内藏助は指をりかぞへて六七年を過ぎこし前君侯の名代として備州松山の城請取にまゐつたこととてあります。昨日の人の身の上は今日はわが身の上、車輪のよう

にめぐりゆく憂世の運命にそこひも知らない深い悲愁を覺えつゝも立派に城門を開渡さりと倉庫の整頓帳簿の整理ひとつも抜目のないように夜の日も寐ずの勤勉であります。

讃岐高松の藩士で武井金左衛門といふものが君侯の命令をうけ探偵となつて人足風に姿を賣しひそかに城内に入り込んでをりました。

それを城内巡回役の吉田忠左衛門が見つけまして、者共召捕れ

と、號令を下しました。發見されたと思つた金左衛門も立派な心掛の武士であります。繩目の耻を受けない先

拙者は隣國の間諜に相違はござらぬ。かく見咎に預かつた上は、割腹いたすより道はない。血汐て城内を穢すは、甚恐縮に堪へないが片隅なりと拜借仕りたい。

と、慇懃に両手をつかへました。忠左衛門は莞爾とうち笑みまして、

いや決して御心配には及ばない。凡臣下たるものは、一命を抛擲して君侯に忠誠を致さなければならぬ。貴殿の御役目、實に大儀に存ずる。吾等と雖、孤城を死守して天下百萬の兵馬に刃向ふ覺悟は更更にない。就いては拙者御先導を致すによつて、構内の模様逐一遠慮なく御見物を願ひたい。

と、隈なく城内を案内したといふことであります。光風霽月の薩張した武夫の心事に、流石の金左衛門も荒膽をひしがれ、感謝の詞もしとやかに、

就いては貴殿の姓名を承りたいと頼入れますと、忠左衛門は懷中から自分の戒名をとり出して、これを示し、

吾等は最早、梓弓のひきてかへらぬなき數に入つて居る浮世の俗名をお聞に達する必要もない

とて正門から送り出したといふことであります。

さて四月もはや十八日、書讀む窓にかの唐土の賢者の雪を訝つた垣根の卯の花も、うつろひはて、深更き裏



のまき立つ山に、杜鵑のなく音またれる頃ほひ、幕府の御上使は到來いたしました。

内藏助は、中村川といふ處まで出迎へまして、早速城中を隅から隅まで、御案内いたしました。道路の掃除、橋梁の修繕から、田畑戸口の取調まで、一點批難のうち所もありませぬ。上使も舌を捲いて感嘆し、別飛脚を立て、其旨を江戸へ注進いたしました。

なほ内藏助は、御先導をしながらも、機会をみては、亡君の御舍弟大學殿が、閉門をゆるされ、奉公出仕の有難い下命を承るようにと、再度も懇願をいたしました。龍田高尾の錦繡織りなす紅葉の、赤誠溢れる詞の端、忠臣の君家を

おもふ心盡の一撃、聞くだに涙の種であります。さて内藏助は開城の残務を何や歎やと手落なく済まし果て、後赤穂在の尾崎村といふ、永年召使つた忠僕八助の故郷に、竹の柱や茨の垣、昨日にかはる詫住居をいたして居りました。

或日のこと忠僕八助は、とる年波に梓の弓を張り出した腰を杖に支へられて、とぼとぼとやつてまゐりまして。承りますれば、旦那様には、そのうち遠地に御住替のこと。六十路の坂を夙に越した梅干爺の八助でありますれば、また今生に麗はしい懐かしい御姿に接することは、到底思ひも寄りませぬ、これが永却の訣別かとおもへば、

血汐に枯れた方寸も、張裂けるようであります。何卒偲出のよすがともなる形見を頂戴いたしたいと頼みました。そこで内藏助は懐中から十兩許金子を取出して、八助に與へ、

老少不定會者定離は、世態の常である。棺桶に釘打れるは誰が先やら分らない。些少な金子ではあるが、手元不如意の今日、悪く思はず納めて、養生の補足にでもして呉れと、賺す言葉に八助は、怪訝な顔をして、これを押返し、老僕は金子などを頂戴に参つたわけではありませぬ。主家離散の今日、亡君が不俱戴天の仇讐、なほ生存らへてゐるにも拘はらず、一藩の武士衆は、皆腰拔の意氣地なし

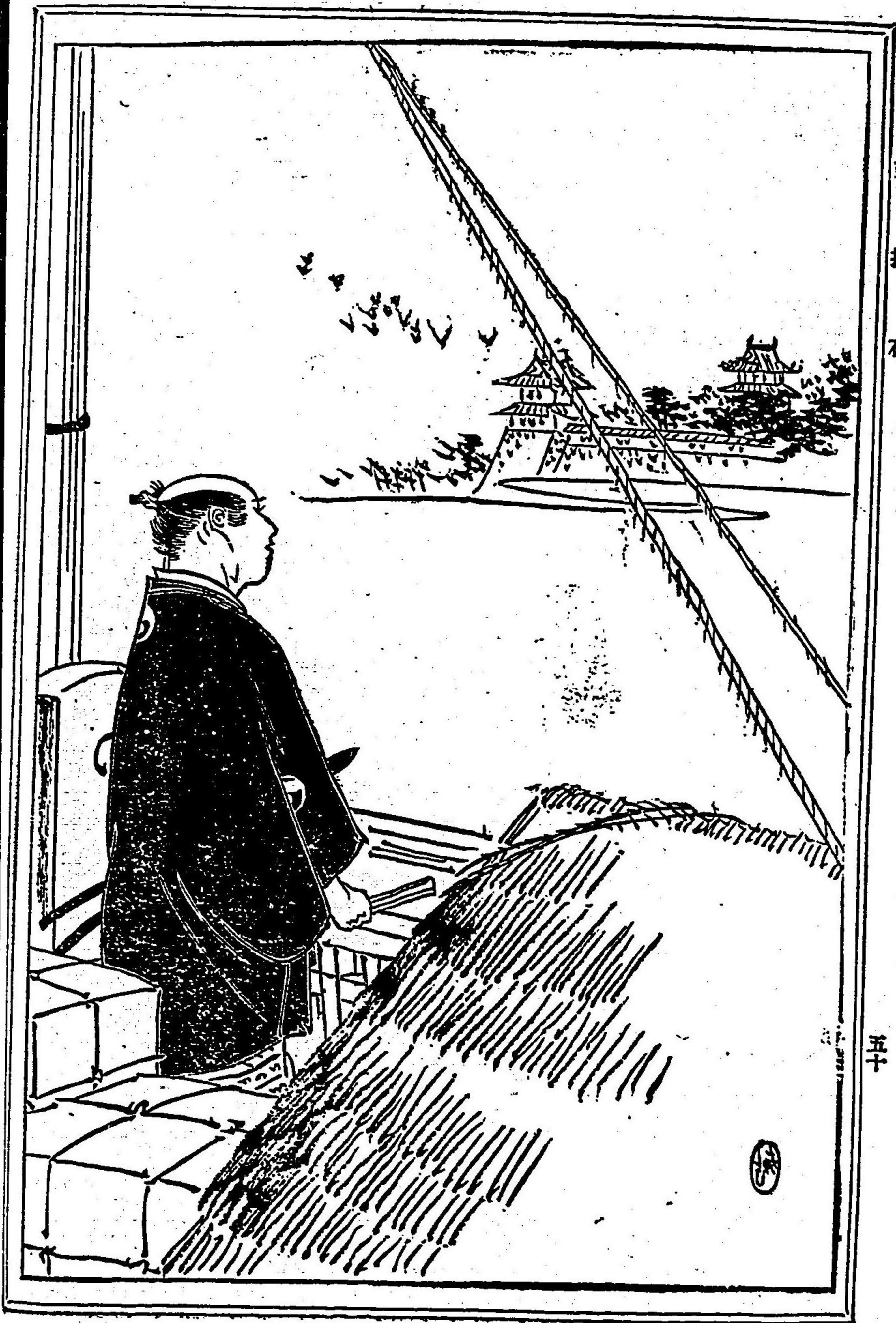
て誰あつて上野介の白髪首をかき斬らうと企てるもの
はない。殊に御城代たる旦那様まで、斯様な淺間敷い心になられたかと思ふと、残念とも口惜しいともいはれた限
ではありませぬ。

と、兩眼から豌豆大の涙の雨をはらはらと落しました。
しかし内藏助は、うかと腹響の眞意を語聞かせる譯に行きませぬ。そこで聊の酒肴をととのへ忠僕を慰撫めつゝ、白紙をさしのべて、威風凜凜たる一若武者、深編笠に長脇差、短袴の股立を、甲斐々々しくとつて、先に立ち、四十恰好の從僕、臂を掲げて、いそいそと、後に踵いて行く畫を描いて呉れました。

これは、内藏助が若年の頃ほひの姿をうつしたものでありまして、當時の元氣がなほ衰耗せず、いまに立派に主君の怨敵を討ちとつて見せるといふことを、それとなく示したのであります。

こゝに八助も始めて内藏助の眞意を悟りまして、打笑みながら、紀念の品を推戴き、やがて偲出多き昔語に耽りつゝ、機嫌よく酒酌みかはして、訣別を告げたといふことであります。忠臣と義僕口には出さぬど、むらぎもの心は宛然符節を合したように似通つてゐる。髓に千載の下に語繼ぐべき美談に相違ありませぬ。

さて内藏助は、心なき赤穂の朝嵐暮烟にも、盡きぬ離別



の至情を寄せて、

世を去りし君が名残の涙こそ

満ちくる潮もわが袖の上

といふ、一首の和歌を手向けつゝ、播磨瀧沖漕ぐ船に浪
 枕を重ね、さらでだに眼覺め勝なる愁眠を、須磨や明石の
 明月に照らさせながら人の噂のよしあしも繁き難波の
 大阪に上陸し、やがて山城國宇治郡山科の里に訖住居の
 身の上となりました。

亡君には妾腹の御息女のみ一方ありましたが、内藏助
 は萬一主家の血統が斷絶するよりなことがあつては大
 變と、これを深くも秘穩しまして、一萬圓の化粧料をそへ

て、京都の日野家へ御預まをし、妙齡の曉には、日野家の姫君として、立派な國守の奥方に縁付けていたゞきたいとお願ひいたしました。

内藏助が山科の里を、詫住居に擇びましたのも、ひとつは亡君の遺愛兒が御成長の模様を、餘所ながら見届けようと思つたからであります。忠臣の赤誠は、一舉一動皆、芷蘭の芬芳を放つて居ります。

これより先堀部安兵衛など江戸に居りまする急進血氣の義士は、大石の奴何を愚圖々々して居るのか、仇敵も六十路の坂を超えた老耄だから、何時無常の風に誘はれるか分らない、黄泉に旅立つた後は、臍を嚙むとも及びも

つかぬと、筑波根の若葉かげしげしげと雁の便を内藏助に寄せて復讐を促してまゐります。

内藏助も六月二十四日亡君の百ヶ日までには是非とも一度は急進黨の取鎮め、旁、泉岳寺に亡君の法要を營みたいと思つて居りました。矢先左の腕に疔が出来まして、發足の運にまゐりませぬ。

それ故に、原惣右衛門進藤源四郎などに意を含めて、江戸表に差遣はしましたが、熟考へると、御目付への御禮、泉岳寺への墓參、主家の再興、同志の統一、瑤泉院への御機嫌伺など、下向しない譯にはまゐりませぬ。そこで頃は霜月の初め、つ方旅路の人となつて、江戸に發足し、残る隈な

く要事を済まして、またまた山科の里に舞戻りました。これより先、赤穂城離散の状態は如何にも不審である。浪士の徒輩は屹度警をうつに相違ないと京阪の評判は専であります。吉良家でも勿論のこと、探偵間者を幾たりとなく使つて、一生懸命に様子をごくつてゐます。そこで内藏助は、これは尋常のこととて、世人の眼を晦ます譯にはいかないと、殊更に都から有名な工匠を山科に聘んでまゐりまして、立派な隠宅を新築せさせて、伴松之丞のためには、澤山の田畑山林を購入して、身は其儘の樂隠居、大義や忠誠の風は何處を吹くかといふような顔をして空嘯いてをりました。

なほそれのみか、祇園島原、伏見、撞木町とあらゆる青樓花柳の巷に足をいれ、月雪花の眺には、多くの藝妓、幫間にとりかこまれて踊もをどれば、唄もうたふ、宛然放蕩親爺そのまゝの姿、或時は酒に酔ひしれて、知らぬ軒場にまろび、寝の夢をむすび、また或時は犬侍と足蹴にされると、腰を抜かし、合掌して命乞をするなど、武士にあられもない亂行の數々に、人には浮き様と綽號せられ、赤穂でなうて阿呆武士、大石でなうて張拔石と、口ぎたなく罵られるよりになりました。

かゝる評判が嵩じるを聞いて、心ひそかに吾謀就れりとうち喜ぶ内藏助が、忠魂義膽おもへば同情の涙に堪へ

ぬ次第ではありませぬか。

悪口雑言をせられると、兎角辨解したいのが人情でありますし、かるに胸中萬斛の赤誠を湛へつゝも、陽り狂して世の輕蔑罵詈を馬耳東風と受流すは、實に仁俠大度の勇者でなければ出来ませぬ。もし花の街に遊興のうち、二豎に罹つて、無常の風に誘はれたら、忠か不忠か、誰にも知らず千載の下に物笑の種となるに相違ありません。内藏助の心底を察すれば、誰か悲哀の情に一滴の涙を濺がないものがありませぬ。

臥薪嘗膽

内藏助が折花攀柳のしだらな遊興に、吉良家の間諜はまんまと騙されて、此上は要心もいらないと一人減り二人退き、計略は思つた壺にはまつてまゐりました。が一方内藏助は、また復讐の準備にをさをさ懈怠はありませぬ。

これより先山科の里も、比叡山風のはげしいなか、一陽來復した元祿十五年の春、まだきには、自分の奥方に、次男大三郎、三男吉之進を添へて、但馬豊岡の京極甲斐守の家老石塚源五兵衛といふ里方におくり届け、偕長男松之丞を膝下に招きまして、

夫天下の大道は、義より重いものはない。去歲主家の兎

變より此降汝の父内藏助は同士を糾合して仇讐吉良の首を斬り亡君の靈を地下に慰めようと鐵心石腸のかたい誓盟をたてゝゐる。汝いまだ弱少にして奉公こそはしないけれど汝が生れたをり亡君親しく來臨せられて短刀一口を賜はつた又汝が五歳の祝賀の節は御殿にお召遊ばして馬場に御連になり何か欲しいものがあるかとの忝い上意に汝が馬を頂戴したいと御對をまをしあげたところ御厩の駿馬を盡庭前に並べさせ汝の選擇にまかせて一頭を賜はつたことがある。亡君の汝を愛せられることは實にかくの如くである。汝は武人の家系に生れ弱少と雖既に十五の齡を重ねたよく耳を敬て慈父の

言の葉を聽けかし。凡生を享けたものは何時か一旦は死ななければならぬ。人に爪彈をせられて高が十年や二十年、浮世の風に餘計あたつて居ても死して千載の下に汚名を残すのは決して羨ましいことではない。豹さへ死しては皮をとゞめるといふ人の死してとゞむべきものは何であるか。此邊をよく勘考して貰ひたい。生の親育の親として其子に黄泉をすゝめるは實に腸を千切られるよりであるが大義親を滅すの金言は確然として萬古に存つてゐる。これ一見残酷に似て居れど本當は汝を深く愛する所以である。

と腹に蜜ある慈父の辭もまだ終らないのに松之丞は

両手をつかへ、
 父上に於かれては、今更改めてかゝることを御質問遊
 されるには及びませぬ。小子弱少と雖、また大義の尊ぶべ
 きを存知してをります。御手足の纏とはなりませうが、今
 生の一願、何卒殉死の御供に加へて給はるるように
 と、辭もしとやかに述べました。
 一方は、死別を兼ねた妻子に生別をなし、また一方は身
 にもかへられぬ可憐な愛子を、死の國に誘ふのでありま
 す。忠義奉公の偉麗を知抜いてゐる内藏助だからとて、悲
 しくないことがありませうか。
 程なく松之丞は元服をし、名を主税良金と改めて討入



の時は裏手の大將となり、目覺ましい働をいたしました。これより先内藏助は、前原伊助、神崎與五郎の兩名を商人に仕立て、本所松坂町の吉良家の長屋前に、米屋と酒屋との店舗を開かせました。

素金儲が目的でありませぬから、思ふ存分安値に鬻りまして、吉良家の侍に出入をつけ、仇敵の模様を洩聞かうといふ魂膽であります。

一方吉良家でも、非常に綿密な要心をなしました。先松の廊下の刃傷から間もなく、親戚上杉、彈正大弼より辭職を出願し、程經て更に隱居の許可を得、閑散な身の上となりましたが、怨恨を擔ふおそろしさに、容易のことでは外

出もしませぬ。また上杉家では、武勇のきこえある侍を新規にかへ込んで、上野介の首の番をしてゐます。

これでもなほ不安心と思つたのか、近近のうちに上杉家の本國羽州米澤に隱遁してしまふとの風の噂が立つたから堪りませぬ。それでは臥薪嘗膽の日頃の苦心も水の泡と消果てぬばならないと、こゝに大高源吾、原惣右衛門の兩名は、旅装も粗忽粗忽に、山科の里に馳せ参じて、委細を言上に及び、最早大事ばかりとつて、愚圖愚圖してゐるべき時機ではないと、内藏助を促しました。殊に堀部安兵衛などは、

なに大石が、蛸螭の葡萄ひまはすよりにしてゐるなら

ば此方にも仕様がある。腕利きの者が四五人もあれば、白髪首の一つや二つかき落すは譯もない

と、以の外の意氣込であります。

しかし、深謀遠慮の内藏助は、更に動ずる色も見せませぬ。成程米澤に隠遁せられては、迷惑至極であるが、舍弟大學殿に、主家再興の、有難い命令が下らないとも限らない。今日殊に血氣に逸つた猛者どもが、盲目滅法のことをしては、またと取返しつかないことが出来ると、こゝに山科に大會議をひらき、一味徒黨を集合して、自分の意見を腹藏なく物語りました。

口に蜜を含めてやるように、説諭す言の葉に一同は今

更ながら内藏助の赤誠と、智略とに感嘆いたしまして、皆一身を放擲して、内藏助の一存に服従しやうと、かたい誓約を重ねました。

吉田忠左衛門を、態々關東へ差遣はし、江戸表の過激黨をとりなだめ、且仇家の模様を探索せさせました。

忠左衛門は、伊勢大廟に參詣をして、神護を念じまつり、江戸に到着してからは、田口一心と偽名して、軍學の先生となり、竊に義士を聚合し、毎晩組をくんで、夜の目も寝ずに吉良家と上杉家とを尾けさせてをります。

山科の會議は、元祿十五年の如月の初めつ方、比良の高嶺の白雪がなほ解けやらぬ頃でありましたが、月日に關

守なく春三月の花の雲世は歡樂の宴に耽つてゐるにもかゝはらず亡君の一周忌は忠魂義膽の志士が千萬無量の悲愁と心盡の間にうち過ぎあふち散る川邊の宿の眞柴戸を深更き五月闇に水鶏のたゞくと思ふ間もなく涼しい風のみ戀ひわたる七月も十八日となりますと突然亡君の舍弟大學殿を赤穂藩の本家松平安藝守綱長に御預となり廣島に蟄居を仰付けられました。

優曇華の花待ち得る時もありかといふ一縷の希望の綱は無残やきりはなされて大わたつ海の一葉舟とりつく島もなきことゝなりました。

そこで内藏助は主家再興も空だのめとなつた以上は

宿志を果すに最早猶豫は無用であるといよいよ關東下向の決心をいたしましたが出發に先だち今一應銘々の心底に探棒をいれて眞か偽かを試す必要があります。

そこで大高源吾、貝賀彌左衛門の兩人を名代として同盟の志士を訪問させ、

實は内藏助儀主家再興大學殿出仕の忝い恩命を樂にして諸君と同盟血判を致した譯であつたがそれがかなはぬ今日五十や六十の端人數で高家の邸に推參するなどは飛んで火に入る夏の虫宿望を果たすなどは思ひもよらぬこと却物嗤を後世に貽すに過ぎない。右の次第故こゝに謹んで誓文を御返却致す

と觸廻はらせました。

さうすると青柿の澁々ながら加盟をした者どもは、成程承つてそれは御尤の次第である。折角連署は致しましたもの、不本意ながら思召に従ひませう。など、體よく返事をして心の中では、二つとない命拾ひをしたと喜んでをります。

しかし眞實の義士は額に青筋を蚯蚓のように葡萄ひまはさせ、

いや近頃以怪しからぬ命令である。大學殿出仕の覺束なきは兼ての覺悟、不忠不義の木葉侍共どの面をさげて、嚙言を觸廻りに來た

と、佩刀に手をかけて怒鳴りたてます。そこでいよいよ心底が突止まると始めて復讐の眞意を披瀝けました。かくて何遍となく篩にかけ選りに選つて見ると、義士の數は五十餘名にすぎませぬ。人情反覆の淺間しさおもへば身の毛がよだつてはありませぬか。

さて内藏助はいよいよ元祿十五年十月七日、風にかつ散るもみぢ葉の赤き心に誘はれて、山科の里を發足し、同盟の義士十人をひきつれ、本馬輕尻を雇つて、これに乗り、種々な道具は長持二竿につめ込んで、雲助二人に昇がせ、自分は亡君御息女の關係もあることでありますから、日野太納言家中の者垣見五郎兵衛と假名をして、赤穂の浪

士といふことを秘めかくし、江戸表に下向の運となりま
した。

望月のひくらむ駒の影こそ見えぬ、旅衣の袖に搦んだ
逢坂の關の清水は浅いけれど、淺くないのは、内藏助が亡
君を懐ふ至情であります。堅田に落ちる雁の竿の堅い誓
盟は石山寺、三五夜中にみがき出した新月の色にもたぐ
ふべきは、忠臣義士の赤誠であります。

かくていはゞしの近江の國の八景のとりどりに愛た
い、明眉の風光も底ひもしらぬ憂愁と謀略とをもつ身に
は、如何に感じたてありませうか。ものゝふの八十氏川の
網代木に、いざよひわたる昔ながらの白波に、旅愁をうつ

す程もなり、美濃路に入れば、かの養老の瀧つ瀬に、孝子の
かをりを偲びつゝ、われは忠臣の鏡とならねばならな
いと心の駒の手綱ひきしめ、熱田の御社を、餘所ながらに
おがみまつつては、首尾よく仇敵を殲すよう、明神の加護
もあれかしと念じつゝ、矢猛心の矢矧川、天龍川、もうち渡
つて、三保の松原、清見寺、富士の裾野を左手にながめては、
このむかし曾我兄弟が十八年の艱難の跡をおもひ浮か
べて、袖に涙もこゆるぎの濱つたひ、戸塚程が谷も、駕籠に
ゆられて通りこし、案じるよりは生むがやすきのたとへ、
誠忠無二の義臣に、神明の加護もあつたと見え、鄙の長路
を穩密に、川崎在の平間村に到着いたしました。

平間村には義士の一人富森助右衛門の知人、て輕部五兵衛といふ百姓がありました。土地の者へは其親戚と偽つて暫こゝに滞在の身の上となり種々うち合はせをなした。後子息主税の寓居日本橋石町三丁目小山屋彌兵衛といふ旅泊に止宿することゝなりました。

江戸表には兼ねてから芝麴町本所深川と三々伍々義士のひとびとが思ひ思ひに蜘蛛のよりに巢窟をかまへて鶉の眼鷹の眼で吉良家の動靜を探つてをります。

人情反覆の頼みがたなきは、またまた五六人の逐電者を出したので、内藏助は師走二日深川八幡前のある茶屋へ一味徒黨を集めまして、更に起請文を認め、血判を捺さ

せ、旁討入の手筈を定めました。

上野介は、仇讐とねらはれる身の危険千萬のところから、病氣にことよせて、平常は三田三光坂の上杉家下邸にゐて、滅多に外出もせず、垂れこめ勝の暮らしばかりでありますから、義士の苦心も一通りてはありませぬ。

ところが、天は忠誠を祐くと見えまして、或時安兵衛と昵近な劍客が、上野介は殊の外茶道を嗜んでゐるといふことを漏らししましたから、安兵衛は其旨を早速内藏助に物語りますと、内藏助兩掌を拍つて打喜び、同盟の士のうち聊茶道の心得のある大高源吾をば、吉良家出入のお師匠さんの門人として、餘所ながら敵情を視察することゝ

いたしました。

何のそのいはをも通す桑の弓、義心忠魂の一徹には、蟻の這出るひまもない敵圍の十重はた重も物の數かは。源吾はこれより、しづのを環に緒を得て、いよいよ本望を遂げる運となるのであります。

千草の花

風も吹かぬに、うつらふ人の心の花に、幾度か篩にかけて、唐紅の真心を試した甲斐もなく、義を泰山の重にくらべ、命を鴻毛の輕にたぐへる武士は、沙磧のなかの珠玉ほどしかありませぬ。しかし跡に残つた四十有餘の人々こ

そ、末の松山の末の世かけて、義士の商鑑と謳はれるだけ、誰人の傳をよみましても、千草の花のとりどりに、芬芳しからぬものはありませぬ。

赤穂義士のうち、武道の達人も數あるなかに、安兵衛武庸は、舊姓を中山といひ、越後長岡の藩士であります。十四歳で孤兒となり、寄邊渚の小笹舟父の罪科によつて浪人の果敢ない身の上、叔父をたよつて江戸にまゐりました。が、成長するに従つて、氣概を尊び、節義を重んじ、文武兩道を兼修め、殊に劍術と來た日には、廣い天下に名たゝる達人でありました。

かの高田の馬場では、鴻恩ある叔父菅野六郎左衛門の



爲に傲慢嫉妬の卑劣者村上庄左衛門以下の奴共をなて斬つて武名を八百八町に轟かしました。

そこで赤穂藩の堀部彌兵衛金丸が其技量にうち込んで養子となつては呉れまいかとの切なる懇望に安兵衛も黙止がたく遂に堀部家を襲いて長矩侯の家臣となりました。

復讐のをりは彌兵衛金丸は七十五歳の老齡でありましたがよく内藏助の旨を含み安兵衛等血氣の猛者を抑へつけ最後の成功を期して父子諸共に不朽の名を傳へました。

また堀部父子は書道にも立派な腕前をもつてゐまし

て、いまも高輪泉岳寺に澤山の遺物が陳列してあります
 そのほか義士のうちには文筆に長けた武夫もすくな
 くありませぬ。吉田忠左衛門などはあれほどの英傑であ
 りますが、歌道はなかく見上げたものであります。關東
 下向の長旅の路すがらも、

夜をこめて越行く旅の空なきや

東雲ちかしと夜の中山

天の原霞も晴れて清見瀉

月をとゞめよ波の關守

など、詠んでをります。義士の副統領として、内藏助の
 股肱となり、一子吉田澤右衛門、舍弟貝賀彌左衛門と共に

節義に殉しました。

また大高源吾は、俳名を子葉といつて、其角などの大宗
 匠とも往來をして、立派な俳句の名人であります。

深草や粟も刈られて片鶉

ながながし、夜やなかんづく草枕

優しいなかにも、武道にかけては、なほ剛の者でありま
 して、討入の夜は、薙刀程の大刀を振翳して、從横無盡に斬
 りまくり、敵の荒膽をとりひしぎました。

源吾の舍弟小野寺幸右衛門は、叔父小野寺十内の養子
 となり、君侯兇變の際には、まだ部屋住の身分でありました
 が、衆に先じて同盟に馳加はつた節義の士であります。

叔父小野寺十内秀和も歌道の心得が深い人でありまして、

定めなき空とも見はず檣の屋に

かならず過ぐる夕時雨かな。

などの名吟があります。討入にとて江戸に下向のをり、

思ひ出せば音羽の山の秋ごとの

色をわかれし袖ぞとも見よ。

よりよりに都に歸る旅人の

數に漏れなん身のゆくへかな。

故さとにかくてや人の棲みぬらむ

とひり寒けき志賀の浦松。

哀別離苦の情さぞかしと思ひやられて、たれか涙の袖を絞らないものがありました。

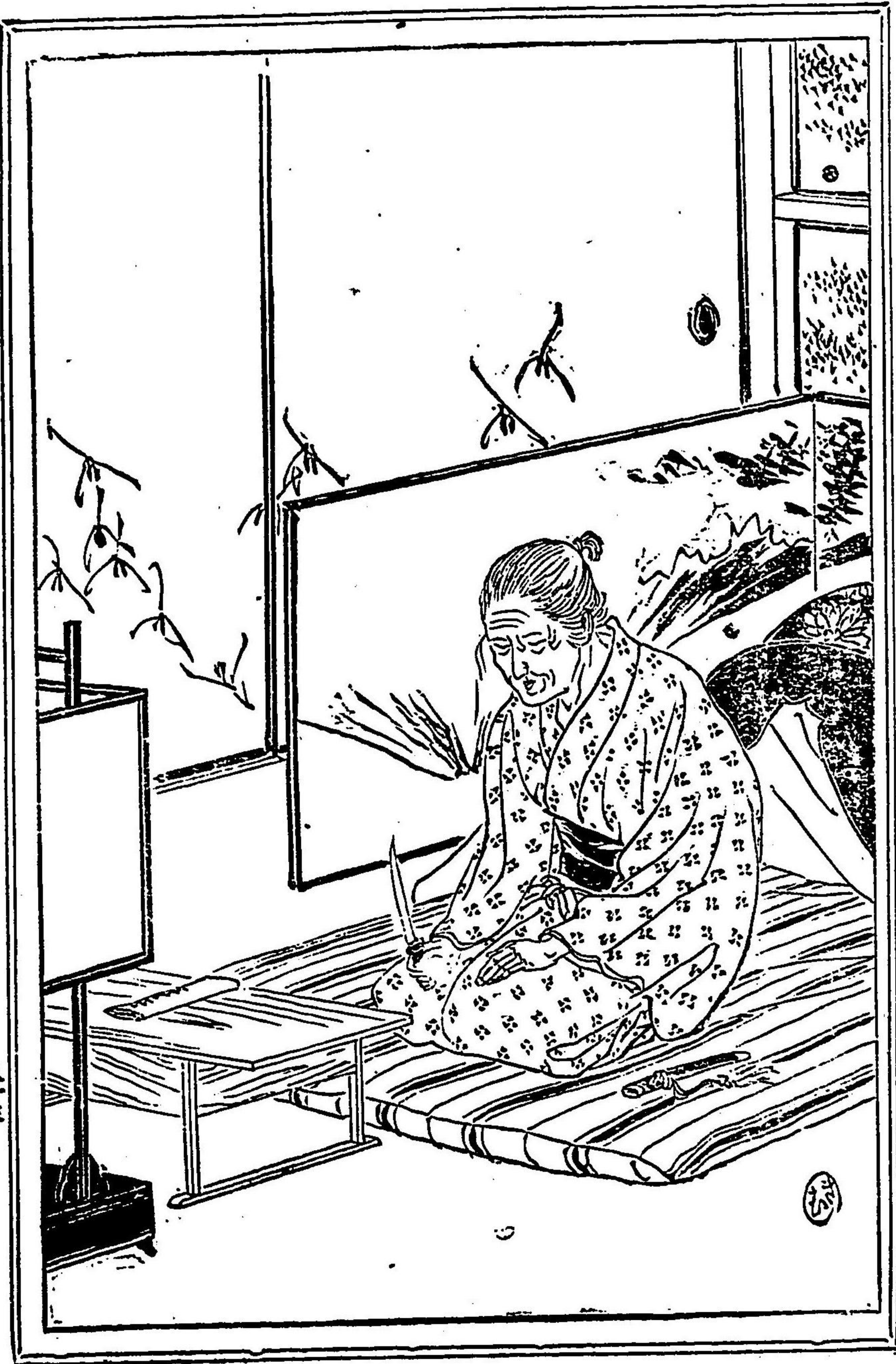
殊に十内は、氣節を尊び、仁義を愛し、伊藤仁齋先生の教訓をうけ、忠誠孝悌の道にかける所はありませなんだ。主家兇變のをりは、とる年浪の五十九歳、わけても陸まじい妻子に訣別れて、江戸に下つて後は、石町三丁目、大石主税と假住居をし、醫者仙北中庵と偽名して、只管復讐の謀略に骨身を碎いてをりました。義士岡野金右衛門は、十内の甥でありまして、一門盡忠節の士を出したのであります。

原惣右衛門元辰は吉田忠左衛門と共に内藏助の股肱といはれた義士であります。兇變の年其老母は七十五歳の高齡の身を以よく復讐の企圖があるに相違ないと推量をつけ兎や角と餘所ながら勵みをつけてをりましたが惣右衛門が江戸表に下向の砌今生の暇乞に參上した時

何しにまゐつた

との優しい質問惣右衛門は

實は一家の整理をつけ且母堂のうるはしい御氣色を今一度奉伺しやうと存じて態態まゐりのぼつた譯であります



とまをし上げますと、
これは御苦勞、

との簡單な、さり氣ない返答でありましたが、翌朝日の
開けるまで臥戸を出ませぬから、不審に思つて覗いて見
ると、行儀もみださず、立派に自害してをりまして、其傍に、
既に今生の訣別を告げながら、後髪ひかされて、用事も
ないにまたまた歸つて來たのは、畢竟たらちねの母に戀
着してゐるからに相違ない、かくては忠義に弛緩の出來
るは勿論のこと、孝に似て孝にも非ず、それ故身を殺して、
節義を勵める

といふ意味が認めてあります。元辰これを讀むや、雙行

の涙雨のごとく、奮然蹶起きて、關東に馳下りました。此母
にして此子あり、萬世に語繼ぐべき美談ではありませぬ
か。

不破數右衛門は、自分の銘刀の斬味を試さうと思つて
墳墓を發掘した咎により、主君から永年の御暇を受け、諸
所を放浪つてをりましたが、不圖途上で磯貝十郎左衛門
に邂逅つて、君家の兇變をきき、舊恩の有難さ、沖つしほさ
ゐのよりに湧返つてまゐりまして、矢の一筋にとゞめも
えせず、遙々山科の詫住居に、内藏助を訪問し、亡君の位牌
冷光院殿の御靈の前に、ぬかづいて勘當をゆるして貰ひ
義士の一人に加はることゝなりました。往昔を忘れるが

浮世の常套であるを、正種の心事、床しいことの極ではありませぬか。

神崎與五郎則休は、年甫十四のをり、従弟のために不頼漢を斬捨た程の、勇剛仁侠の士であります。が、歌道の嗜もまた格別で、

旅人も道は迷はじ水の上に

雪一筋の瀬田の長橋。

ふりつもる程ぞ知らるゝ若竹の

伏見の里の夜の雪折。

宇津の山うつればかはる色見えて

若葉をわくる鳶の細路。

などの名吟もあります。復讐の時は前原伊助と共に、吉良家の門前に雑貨店をひらいて、探偵の任務に当たつてをりました。

赤垣源藏は神崎與五郎と共に、義士中での大酒飲で、且平常は誠に辭すくなの、木強漢でありました。しかし巧言令色に仁鮮しと、孔子もおほせられた通ちやんと大義は心得てをりました。討入の前夜、鷲毛と降りしきる六つの花を、合羽の袖に拂ひつゝ、妹婿本間安兵衛を訪ひ、今生の名残を惜みながらは、はからず酒杯の數を重ね、暗涙に咽びつゝ、甥の頭を撫で、

坊は好い兒だ、成長したら目覺まし、いまで立派の士と

なれよ。叔父がおひ先を祝つて、佳い物を呉れる

と、それとはいはねど遺品の短刀、一口を與へ、醉歩の千鳥足、よろよると立去つたといふことであります。

杉野十平次は、かの大砲を脇坂家に賣渡した、萩原兵助の縁者で、富豪の身の上でありましたが、極めて小祿の分際、且君侯からとりわけて眷顧を蒙つたといふでもない。普通大低の者なら、早速おさらばをきめ込む所であり、さすが松栢の操は、萬木凋落の後にならば、自身同盟に加はつたは、勿論のこと、家財道具一切を賣拂ひ、大枚千兩の金を惜氣もなく放擲して、復讐の費用に充て、萬代不磨の芬芳しい名をとどめました。

片岡源五右衛門高房は、磯貝十郎左衛門と共に、亡君の割腹を見届けた當夜、萬松山泉岳寺において、警を切つて復讐を盟つた程の忠魂義膽の士であります。主家離散後は、暫伏見の里に假住をして居りましたが、いよいよ討入も間近になりましたので、妻子を振捨て、江戸表へ下向の途次、名古屋の生家に、餘所ながらの暇乞として立寄り、父上熊井十次郎に面會いたしました。

御無沙汰にうち過ぎまして、申譯もありません。實は昨春以降、見る蔭もない鶉衣の零落た淺間しい姿を、御覽に入れるのが心憂く、つひ失禮勝になりましたが、幸仕官の途を得ましたにより、御機嫌伺に參上した次第であります。

す。

とまをし上げると、父上は看る看る怒氣をあらはされ、
 嚙言をいふな。武士の清貧が何の耻になる。其方熊井の
 家に生れ片岡姓を相續し、亡君からは殊の外の寵愛を辱
 うしてゐながら、主家斷絶の曉に及んで、二君に仕へると
 は、卑下げはてた根性腐奴、目通一切相成らない
 と、席を蹴立て、奥の一間には入つてしまひました。
 高房は父上の憤怒を解く爲に秘密の計畫を物語る譯
 にも行かず、八重の雲霧いかに立籠めても、いつかは月影
 の清光をしめさでやむべきと、暗涙に咽びつゝ、佩刀の小
 柄を遺品として残し置き、草鞋の紐ひきしめて、江戸に馳

向つたといふことであります。復讐の報知を得た時の父
 上の胸裡定めて歡喜と悲憂とが、荊菝の交錯つたてであり
 ませう。

磯貝十郎左衛門正久は、片岡源五右衛門とは、刎頸の仲
 善友たちであります。幼少から能や鼓は妙手で、遊藝に浮
 身を窶してをりましたが、兒小姓に召出されて後は、君侯
 に近く侍つて、絶えず寫本の御用を承り、こゝに學問仁義
 に志し、遂に廿四歳の青年として、同盟に加はりました。た
 ゝ玉琴の手すさびばかりは、終生やめなんだといふこと
 であります。これも奥床しい人格を偲ぶよすがとして、涙
 の種の語草の一つであります。

富森助右衛門正因も、義臣の仲間でありましたが、平常、凡武夫たるものは、精忠無雙でなければならぬ。それが爲には、如何なる事變に、何時遭遇つても、不覺を取らない用意が必要である。

と、邸内に乗馬を蓄へ、懷中に二十兩の金子を絶やしたことは無かつたとのこと。臣下たる者の心掛として、天晴の次第ではありませぬか。

近松勘六は、其實弟奥田澤右衛門と共に、義士の床しい連名に加はつた武士であります。が、追討入も近づいてまゐりましたから、年來召使つて置いた忠僕甚三郎に、それとなく暇をやつて、郷里に送還さうとしたが、仲々承知

をいたしませぬ。

僕熟様子を窺ひますのに、最早復讐も眼前に迫つたよりに察せられます。討入の當夜は、僕もお後に従つて、未熟ながら一刀を仇敵に報いてやらうと、弓矢八幡に誓願をこめて居りました。を不束者との御所存で、永の暇を賜はるとは、残念至極。

と、杯の實の大涙を落しました。匹夫の志も奪ふべからず。そこで勘六は、

其方が主人への忠節、身に泌みて有難くは思ふなれど、大石からの嚴命に、今度の連盟は、赤穂の藩士に限り、其他は如何ある縁故の者にて、決して許容されないとこのこ

と悪く取らずに言ふことを聽いて呉れ、
 と止むなく明かす秘密の胸に、甚三郎も潔く暇を頂戴
 し討入の當夜は、蜜柑と葛餅とを仕入れ、吉良家の門前に、
 義士の連中を待受けて、其勞をねぎらひつゝ、これを振舞
 つたとのこととであります。蜜柑と葛餅との値段は、現今の
 一圓にも足りませんが、其忠魂義膽の値段は、千億萬圓
 無量の至寶とも交易へることは出来ないてあります。
 又橋本平左衛門は、籠城論や、殉死論を唱へて節義を勵
 んで居りましたが、御城明渡藩士離散となりましたので、
 甚機嫌を損じ、精忠無二のこゝろより、同志を感激せさせ
 ようと、自腹を斬つて、君侯に殉しました。内藏助の眞意を

も悟らず、少し性急であつたかも知れませぬが、立派な節
 義は忘れてはなりません。
 又岡野金右衛門は、夙から節義の武士でありまして、一
 藩離散の後、近江の膳所にかくれて、只管復讐の時期を
 待つてをりましたが、無常の風に誘はれて、此地に病死し
 心あらずも君侯のあとを、黄泉におふことゝなりました。
 萱野三平重實は、父上を七郎左衛門重利といつて、旗下
 大島出羽守の家臣で、三平は其次男に生まれましたが、出羽
 守が、其聰明なのに、眼星をつけて、内匠頭に推薦め、遂に其
 近侍となりました。

三平は、松の御廊下、刃傷の當日、早水藤左衛門と共に早

駕籠に乗つて、赤穂に使者としてまゐります途次郷里攝津の萱野を過ぎますと、むかひの方から親族や昵近の人が、棺を圍んで野邊送をするのに邂逅ひました。

そこで三平は、駕籠を駐めて、誰人の葬式であるかと尋ねますと、

餘の人ではない、御身の母上の葬式である

との返事、三平我を忘れて、駕籠から飛下りようと致しました。が、やがて氣を取直し、一家の私事の爲に、主家の公事を廢しては、不忠不孝の者となると、其儘赤穂をさして一徹に馳せつけ、開城の後、故郷に還つて來て、こゝに始めて母上の喪に服したといふことであります。

其後も萱野と山科との間は、物の十餘里しかありません。ぬから、三平はをりをり内藏助を訪問して、餘念なく復讐の謀略をめぐらしてをりました。しかし父上は、三平が若年で、浪々の身の上を不憫と思はれ、養子を勧めて、如何に辭つても、承知しませぬ。忠孝兩全は、誠に困難のこと、三平は進退谷まつて、宛然板狭のよりになりました。

そこで三平は、いろいろに慮廻らして後、これは立派に切腹して、赤い心の證明を立てるよりほかはないと、遺書を細細したゝめて、山科に使者を遣はし、時は陸月十四日朝まだき、亡君の御命日を選んで、天晴の自害をいたしました。

秋の野に繚亂れる、千草の花の芬芳は、藻鹽草なかなかにかき盡くすことはできませぬ。こゝに姑をしい筆にとぐめを刺し、雪の曙の物語に白駒の足搔をすゝめねばなりませぬ。

雪の曙

こゝに大高源五は、しづの苧環に復讐の緒を得やうと、町人風の身拵をし、京都の呉服商人と虚言を吐いて吉良家へ出入の茶道のお師匠さん、四方庵宗遍の宅にまゐり、金子千疋縮緬一疋の立派な束修をいれて、旨旨御弟子となりすましました。

或時四方庵は、浮世話の末に、師走十四日には、吉良家に忘年の茶會があると問はず語に洩らしました。源五は小雀のように雀躍をしてうち喜び、當夜は屹度不俱戴天の上野介本所の自邸にゐるに相違はないと、此旨を内藏助に報告を致しました。義士の人々はこれより色めき渡つて、大活動を開始することゝなりました。

十四日といふと、亡君の御命日に當るも不思議である。若やもすれば、神明がわれ等の精忠を嘉せられて、冥々のうちにわれ等を加護り下さつて、亡君に紹介せて呉るのではあるまいかと、一黨の元氣は、素晴らしいものであります。

そこで萬端の用意手順も、残る隈なく整つて、今は引絞つた強弓の放てば虚空をきつて飛ばむばかりの姿となりましたから、同盟の義士四十七人は、うちも揃つて萬松山泉岳寺に墓參をして、亡君の靈前に、今宵の捷利を默禱し、晩景の再會を誓つて、一旦開散をいたしました。

師走の空の忙しそりな雲の足が、すこし鈍つたと思ふ間もなく、六花の雪が紛々と、十三日の夜すがら降りしきつてをりました。が、復讐の當夜は、一天名残なく霽渡つて、剩月宮殿の月姫が、やさしい笑顔を寒空に見せてゐます。

義士のひとびとは、上方へ出立といふを口實に、夕景には店賃を拂ひ、荷物を片づけ、兩國橋の袂、米澤町の堀部彌兵衛

の詫住居に立寄つて、首途の祝杯をくみ交はし、それから思ひ思ひに、林町の堀部安兵衛の詫住居に集合して、こゝに勢揃をいたしました。

義士討入の扮装はといへば、先腹巻仕立鎖帷子の着込裏には、萌黄の錦襦を用ゐてある。それに浮紋の裁書を纏ひ、紅梅裏の黒小袖羽織は、黒羅紗で襟と袖とに白の覆輪がついてをります。頭巾は、黒滑革で拵へ、白滑革を以縁をとり、鍔をつけ、忍の緒には調を用ゐ、頭巾の裏には、兜の鉢を包んで、正面から斬りつけられても、大丈夫にしました。頭巾といはず、衣服といはず、匂ゆかしい伽羅を薰込んでおります。これは一旦討死の曉には、死體の臭氣を名香でう

ち消さうといふ立派な周到つた用意であります。またかく華麗な扮装をしたのは、永らく浪々の身の上に借りつめ食ひつめて、捨鉢に自暴をおこして討入つたといふよるな評判を立てられない爲、殊に金子二三兩を紙に包みそれに

元禄十五年十二月十四日、討死の節屍體を取納吳候人の酒代に差上候

と書きつけて置きましました。死後に名節禮讓に後指をさされまいといふ覺悟男子たると女子たるとを問はず、此心掛がなくてはなりません。また白布を細くくけ合せ、心には鎖を入れた襷を懸け、背中には各姓名を記した布片

を、ひらひらと靡かせて、味方の目標といたしました。また佩刀は、殊更に吟味をして、みなみな立派な業物を帶してをりました。これは亡君が非常に刀劍を好愛れて、澤山買込んであつたのを、義士の連中に、内藏助が分與へたからであります。

上野介の邸宅は、相生町にありまして、回向院とは裏つゞき、東に表門西に裏門が開いてをり、三十間に二十間といふ堂々たるもの中庭を隔て、奥廊下を越えるところ、が上野介の隠居所となるのであります。

さて一同は、午前四時とも覺しい頃、有明の冴渡る月光を浴びつゝ、白雪の上をしづしづと、二手に別れて、裏と表

の方より吉良の邸宅に夜襲をこゝろみましたが、出發に當つてもとより梓弓の無き數にいる一命に、辭世の歌を託したのもすくなくありませぬ。吉田忠左衛門は、

君がため思ぞ積もる白雪を

散らすは今朝の峯の松風

と、詠じ神崎與五郎は、

梓弓春近ければ小手の上の

雪をも花のふゞきとやみむ

と認めました。また間喜兵衛は、春秋重つて六十八歳の老翁であります。が、

都鳥去來ことゝはむ武士の

耻あるよとは知るや知らずや

と、書付けた短冊を、槍の柄に結着けて、曉方の寒風に翻してをります。

また岡野九十郎は連盟に加はりながら病死した亡父の遺志を示さうと袖符の上に墨も黒黒と、岡野金右衛門、包秀と自署して、出陣いたしました。矢頭右衛門七教兼も生年十七歳の身を以、亡父の戒名を頭巾のうちに納れてをります。忠臣孝子の心情かへすがへすも奥床しいてはありませぬか。

儲大手の方は大石良雄大將となり、軍麾を以指揮をする同勢二十三名は、二挺の階子を猿のように攀上つて、瞬



に邸内に闖入いたしました。

また搦手の方は大石良金大將となり、これも同勢二十三人、吉田忠左衛門を後見とし、大鉞大槌を以て門扉を打破り、千軍萬馬のおし寄せせるも、かくやと思はれる程の元氣であります。

寢耳に水鐘にはあらで、寢耳に白刃の振舞を受けるとへあるに、徹宵の宴會に疲勞れ果て、の寢ぼけ顔、途方に暮れて顛倒狼狽、膽を潰してぶるぶる者、刃向ふ勇士とてありませぬ。清水一學、小林平八郎等の腕利も、皆槍玉に擧げられ、徒に白雪を八入の血染に彩りました。が、肝腎の上野介は天に翔けたか、地に潜つたか、影も形も見えませぬ。

そのうち大石瀨左衛門は座敷のなかを狼狽へまはつて居る小者を捉へ氷なす刀刃をつきつけて畏怖し上げ、上野介の寢所に案内をせさせました。

と見れば二枚戸を外から坪がさしてありまして這入つた者として無い氣色。しすましたりと踏込めば圓行燈の影淡く絹布の夜具は藻抜けの殻である蒲團のうちに手を差込めばあづかに残る暖氣に君はまだ遠くはゆかじわが袖の袂の涙冷えし果てねばと古歌に詠んだは人こそ違へわが仇讐もいまだ遠くは遁去るまいと再勇氣を振起して奥中を探廻つたけれど、更に見當りませぬ。嗟乎多年の苦心も水の泡神や佛は此世におはさない

かと地に哭き天に呼ばひ一同は落膽して墜と坐りこんでしまひました。

ところが臺所のあなた炭部屋ともおぼしき一室にひそひそと人の小話の氣はひが聞えます。まさかと思つて錠前をうち破つて踏込むと二人の者が外部を目蒐けに逃出すを立どころに斬伏せましたが、なほ黒い影が一つある不審の奴と引摺出して、

汝上野介の居所へ案内を致せ案内をせぬと、一刀の下に斬拂ふぞ

といへども更に返答をいたしませぬ。此奴小癩なと間十次郎は槍をふるつて突伏せさま燈火に顔を照らして

見れば、寝巻に白無垢を着けた六十路あまりの老人である。これこそまがふ方なき當の仇敵、上野介義英に相違はないと、大廣間にひき出して、真中に坐らせ、内藏助は慇懃に兩の手を疊につかへ、

われ等淺野長矩の遺臣ども、亡君の宿志をついて、今日といふ今日、御首を頂戴に推參を致しました譯なれど、高家の御歴歴に對ひ奉つて手向をするのは甚恐縮に堪へませぬ。ついては此懷劍は、亡君の所持したものの不束にはあれど、これを以御自害遊されたい。介錯の儀は及ばずながら、小臣御用をつとめるてありませり

と言辭も鄭重に申述べましたが、貪慾の卑劣老爺奴、か

ゝる場合に立至つても、更に決心がつきませぬ。それどころか一同が頭を叩けて平伏してゐる隙を窺つて、逃出さうとしたから、今は猶豫すべき時でない、と内藏助は懷劍を取直して、一刀の下にとゞめを刺し、一番槍を入れた功勞によつて、間十次郎に首をうち落させました。

かくて竹林唯七は、上野介の白無垢の袖をむしり取つて、これに首級を包み、槍の穂先に貫いて、高高と黎明の空にかゝげまして、銅羅をうつて一同を裏門に集め、點檢勢揃を致しましたが、一人も討死したものはないのみならず、敵の刃に傷いた者もない大願成就の雪の曙、四十七士の歡喜は如何ばかりでありましたらう。

さて一同は燈列ぬた蠟燭を吹消し、圍爐裏や火鉢には水を濺いで、火災を豫防し、また隣家土屋主税の屋敷に對つては、深更に及んで御邸内を騒がせて甚恐縮に堪へない、唯今上野介の首級をあげて高輪泉岳寺にひきとる旨を塀越に挨拶してしづしづと永代橋から汐留橋、芝の方へと隊伍もみださず赴きました。仇敵を殲したとて、有頂天にあるようなことにはない、立つ鳥も跡をにごさず、用意の周到つてゐるのは、實に感服の外ありません。吉良家の裏門を立出ると、富森助右衛門は大高原五と幸喉も渴いたこと此邊でひとつ祝杯を舉げようと、相談一決し、近所の居酒屋を叩き起こし、酒代二兩を放擲し

て、怖がる主人の荒膽を挫ぎつゝ、槍の鑊で薦被の鏡板を突破り、舌鼓をうつつ、續け様に兩三杯、大高子葉は何條堪るべき、微醺機嫌に吟腸を絞りつゝ、

山を抜く力もをれて松の雪。

日の恩や忽擢く厚氷

と唸出しました。助右衛門も俳名を春帆といひ、一角の宗匠でありますから、すぐに、

飛び込んで、手にもたまらぬ霰かな。

寒鳥の身はむしらるゝゆくへかな。

と相和したといふことであります。英雄の胸中、閑日月あり、奥床しい限ではありませぬか。

さて一同の義士は、満面に微笑を湛へながら、萬松山泉岳寺にひきあげましたが、金杉橋をわたるをり内藏助は磯貝十郎左衛門にむかひ、

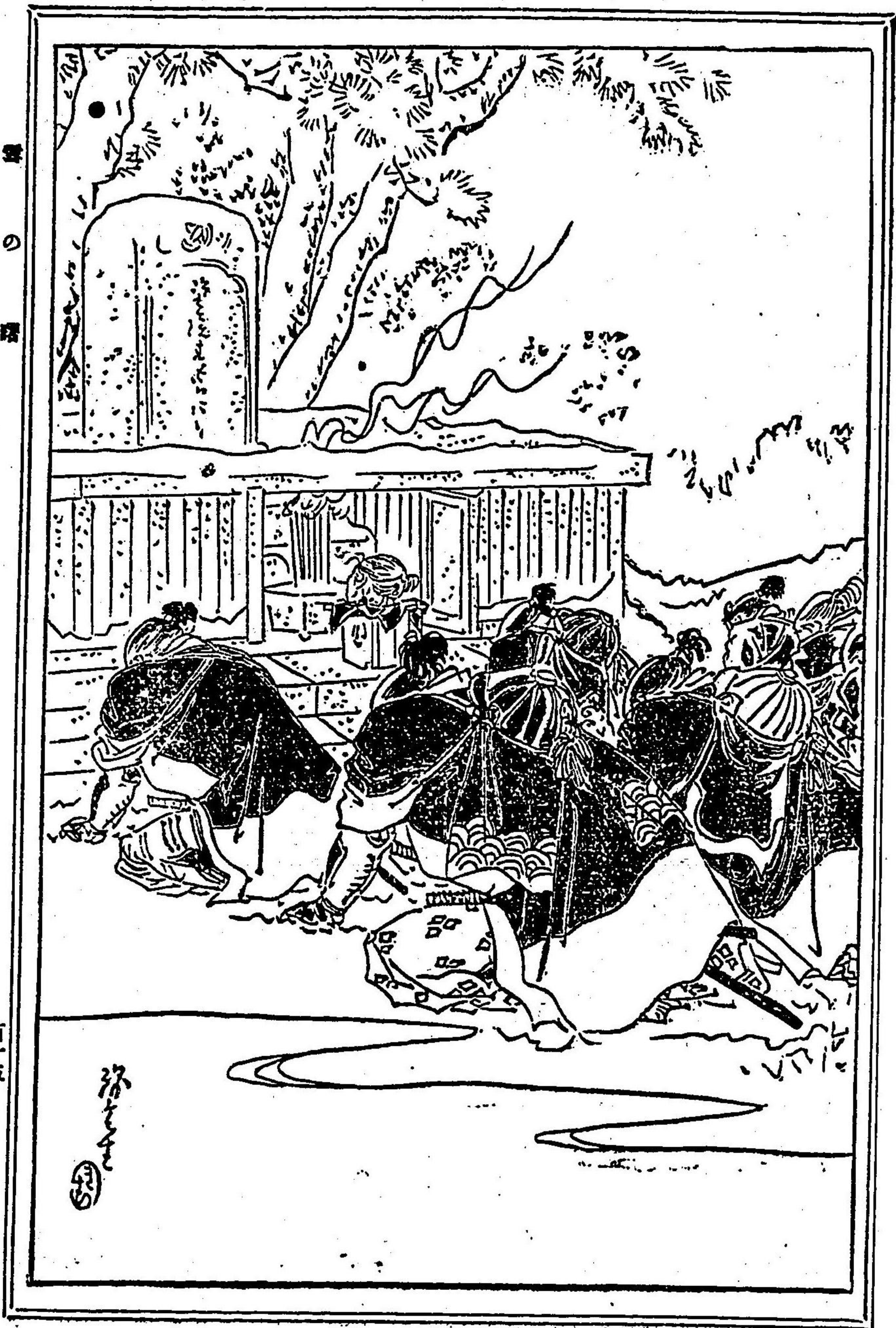
きけば貴殿の母堂は重い病の床に臥し、旦夕の程もはかられないとのこと、丁度住宅も近傍であれば、一走に御機嫌を伺つてまゐつたらいかゞ

と、勧めましたが、

既に同盟に加はつた以上は私親などを省るには及ばない

と、辭退したといふことであります。

やがて一同は泉岳寺に到着して、山門内に入らうとす



泉岳寺

ると方丈は拔身の槍に弓薙刀血汐ににじんだ行装の見
幕に恐怖をなして固辭らうといたしましたが承天則知
といふ役僧餘程の傑物とみえ門扉を披いて構内に導い
て呉れました。

内藏助は槍の穂先から上野介の首級をぬきとり眞清
水にて洗淨め三寶にもつて冷光院殿前少府朝散太夫吹
毛玄利大居士の墓前に供へ恭しく一炷の焼香をし千萬
無量の胸裡を一縷細煙にことよせてひきさがると續い
て四十餘人の義士はりつめた勇氣の一時に緩乎弛む心
地皆感慨に逼つて嘘啼をしながら焼香をへました。苔
の下の亡君もさぞかし忠誠を嘉せられて遺恨の叢雲こ

ゝにはじめて霽渡つたこととありませう。

一方内藏助はひきあげの途中から吉田忠左衛門と富
森助右衛門の兩名を幕府の大目付仙石伯耆守久尙の邸
宅に差遣はし昨夜の顛末逐一を言上に及びました後
亡君の讐討とはまをせ城下を騒がせ貴重の御人を殺
害致した罪如何なる處刑を受けましてもさらさら不満
はありませぬ。一味徒黨は恐縮措く能はず皆泉岳寺にひ
きあげて靜肅に公邊の御沙汰を待つてをります
と懷中から連判帳をとり出して差出しました。
伯耆守もほとほと感服をせられまして一應大畧の訊
問をなして後登城をして老中に言上に及び再邸宅にひ

き退つて、
 兩名の者最早用事もない泉岳寺に推參して、何れ公邊
 から沙汰のある迄謹慎にも謹慎を重ねてゐるように
 と説諭されました。

萬山不重

義士のひとびとは墓前のお焼香をへた後は白粥に
 般若湯の饗應に預かり辛とのこと二年ぶりの安閑した
 骨延ばしを致しました。此時内藏助は、
 兎に角に思ははるゝ身の上にしばし迷の雲とてもな
 し

と詠出しました。すると岡野金右衛門も、

そのにほひ雪の淺茅の野梅かな。

といふ俳句を亡君の墓前に手向けました。

そのうち以前連判をしながら卑怯未練にも中途で逃
 失せた高田郡兵衛中田理平次などが酒肴などを提げて
 まゐりまして、

吾等昨晚後馳ながら吉良家の邸に驅付けましたが既
 にお引揚の後で遂助太刀も致さず誠に残念に堪へませ
 ぬ

などと胡麻化しのお世辭を述立てましたが忠臣義士
 の武夫はその手は桑名の焼蛤手強く刎付けてしまひま

した。面の皮の厚がましいのには、驚くの外はありません。十五日は幕府の恒例として、諸侯登城の日であります。そこで大老を始め、老中、若年、寄相談の上、まづ御徒士目付を使者として、泉岳寺に派遣し、赤穂の浪士輩を一應愛宕下の仙石伯耆守の邸宅にめしつれてまゐり、連判状の點檢をいたしました。が、寺坂吉右衛門が見えませぬ。吉右衛門は如何致したとの伯耆守の質問に、内藏助、
 彼者は足輕下郎の身分、一旦は連判状に加盟いたしましたもの、中途生命が惜しくなつて、吉良家の門前より逐電致しました。



との返答であります。實は吉右衛門は足輕の小身者にもかゝはらず忠義の志は金鐵よりも堅く、勿論殉死の覺悟でありましたが、十四日の夜、内藏助の使者として、亡君の奥方瑤泉院へ討入の報告にまゐり、辛とのこと、黎明に泉岳寺へ辿りつきますと、今度は苦勞千萬ながら、舍弟大學殿に、首尾より仇敵を殲したと注進しては呉れまいかとの重ねての命令に、

今迄一緒に骨身を碎いて、復讐を謀り、今更一人仲間外しにされるのは嫌で堪らない、

と、一應辭退を致しましたが、忠義に二つはないと、心を取直し、旅装も甲斐甲斐しく、遙遙二百里の長路を使者に

まゐりました。

儲還つて見ると、同盟の義士は何れも切腹の後であります。そこで老中の許へ参り、しかじかの次第を言上して、改めて切腹を仰付けられたいと、愁訴へしましたが、

最早事件も濟んだ跡、其儀にも及ばないと、勿付けられ、惜しからぬ一命を生永へることゝなりました。諸大名のうちには、其節義に感心して、随分高祿で召抱へようとすものもありましたが、忠臣二君に見えず、長壽を保つてみまかりました。

伯耆守はまた、

大石主税とまをすは何處に控えをるか

と問はれるので主税は、
こゝに罷在ります

との應對に、

其方十五歳の若年といふが身長五尺七寸とは立派な
體格内藏助も良い子を持つたな

と賞讃の辭であります。良い子でなくて何であります
う。これを聞いた一同は、滋き涙の袖を絞つたといふこと
であります。

それより内藏助以下十七名は細川越中守へ御預け、主
税以下十名は松下穩岐守へ御預け、岡島八十右衛門以下
十名は毛利甲斐守へ御預け、間十次郎以下九名は水野監

物へ御預けとなる旨をまをし渡され最後に尋常の囚人
とは品異なれば大切に取扱ふようにと、四家へ注意を與
へられました。

内藏助は主税と訣別れる時膝下に主税を招寄せて、
最早今生に於いて其方と再會ふことは出来まい。しか
し昨朝以來吳もまをし含めて置いた通萬一公邊にお
いてわれ等浪士が精忠無雙の振舞をめでられて、無罪放
免の忝い恩命に浴するよりなことがあつたにしても其
方と父上とは必切腹を致さなければならぬ。決して恩
命のお請けをすることは宥さぬ。此一事を忘却すれば地
下に於いて父上が其方を恨みるぞ。

と懇懇と説諭される言葉に、主税良金は、
父上大丈夫であります。御安心遊ばすよりにと、力強い
一言を名残に西と東にうち別れました。

細川越中守は、水戸義公の甥に當りまして、學問節義を
勵んだ賢明な藩侯でありますから、義士の待遇も鄭重で、
更に手拔かりはない。まづ逆上ては身體に悪いと、駕籠は
左右の窓を明放し一挺毎に、定紋の着いた高張提灯二張
箱提灯二張、騎馬一人、徒士使番一人を附添として、芝白金
の中屋敷へ昇いでまわりました。越中守は大名小路の上
屋敷から、態態中屋敷に赴かれ、五十萬石の大守を以着込
姿の義士に、直直面會せられて、

其方共の忠精鬼神もその壯烈に泣く。誠に神妙至極で
ある。大願成就の今日、更に遠慮はいらない。心長閑に休息
をせよ。處用があるならば何なりと容赦なく言出すよう
に

と忝いお辭を頂戴いたしました。

先一人につき、立派な小袖三襲づゝを拜領し、日當のよ
い座敷を修膳して、そこに引移らせ、用紙硯箱、火鉢、炬燵、蒲
團、衝立、具はらないものとしてはありませぬ。

殊に膳部は朝夕をとはず、二汁五菜、山海の珍味に舌鼓
をうちきれませぬ。家臣の立派な武士を選んで、接伴役と
して交代に無聊を慰めるなど、痒い所に手の行届かない

隈もありませぬ。

他の三家では初は駕籠に銃前を下したり、または綱乗物などを用ゐて、極悪人の取扱を致しましたが、皆細川家をみならつて、相當な禮遇を盡しました。これも忠義名節の賜に相違ありませぬ。

また細川家では、義士の大小に一本残らず研磨をかけ、修膳を加へましたが、いづれも亡君の遺物分の品だけに、抜けば玉散る秋水の立派な大業物ばかりでありましたので、一方ならず驚いたといふことであります。

殊に内藏助の大小は相州もの、亂焼鞘は黒塗黄金造で、黒檀の小柄の柄には、

萬山不重君命重

一髮不輕我命輕

と彫付けてありました。丈夫の眞心は、瑣細なものにも表はれて、實に奥床しくおもはれるではありませぬか。

さて師走の月も品川灣を掠めて來る海甸の潮風に吹きすすてられ、一陽來復の世は元祿十六年の正月となりました。細川家では一同に慰斗目小袖の紋付に麻上下を頂戴になりました。これは亡君の生前に淺野家へ仕官をして、をつた通に致されたのであります。

二月も二日となりますと、越中守は後室と令息とをお伴れになつて、内藏助に面會を許され、一同には鶴の吸物を下されました。これは彌二月四日に切腹を仰付られる

から大層な御馳走を賜はつたので一同は感涙に咽びました。

こゝに富森助右衛門は細川家接伴役に向ひまして、われ等天下の法度を破つた大罪人、おそらく小塚原か鈴が森磔刑に處せられる筈ではありませうが萬一柳營のお慈悲により切腹の有難い仰付を蒙むつた曉には、今生に唯一つの御願何卒死骸は一纏に亡君の墓側に埋葬つて下されたい

と懇望に及びました。死しても君側を離れまいとの至情に、いかですげなく拒絶することが出来ませうか。

さて二月四日には御目付荒木十左衛門以下細川家下

屋敷に参られて切腹を仰せつけられ他の三家へも夫々同様の申渡がありました。

一同は兼ねての覺悟更に動ずる色も見せませぬ。喜勇んで死地につきました。遺骸は勿論泉岳寺に亡君の棺側を幾千代かけて護るよりに鄭重に埋葬されました。

切腹に先つて、お目付荒木十左衛門は内藏助に向つて、上野介の子息左兵衛佐は嚴父の命を殞す節一矢も刃向はず、剩後刻剃刀を以故意と自分の前額を傷け、手負のよりに見せかけて、公邊を欺かりとしたは、不屈至極であるから知行を召上げられて諏訪安藝守へお預けとなつた。

と報告せて呉れました。此父にして此子あり、一門の卑劣根性實にきくだに胸が悪くなつてまゐります。一同はこれをきいて今はの際のよい手向と雀躍して喜びました。

父も卑劣なら子も卑劣。臣下はなほのこと卑劣であります。吉良家の家老の孫兵衛宮内は義士の討入ときいて、何は儲おき生命を失しては、取還はつかないと、早速溝渠の下水口から逃出し、町内の番屋に一合程に縮まつて居りました。最早義士が引揚たとの評判に、またもと来た下水口を邸内に潜込みました。宛然泥鼠のようであり、ます。門前の町人共が、これを見て悪戯半分に下水口へ、

此處家老の外出入すべからず、

と立札をしたとのこと、興味のある語草ではありませぬか。かような奴は本當に泥鼠と擇ぶ所はありませぬ。

凡人間の崇いところは、何處にあるか。爵位でもない、財寶でもない、學藝でもない、容貌でもない、仁俠節義の磐石かたい心掛である。山は抜くべく、海は覆へすべきも、誠心の一徹は、洪水も流すことは出来ない、猛火も焼くことは出来ない、實に無限の偉力であります。

今や贗文明の結果、世を擧げて華美やかなことのみ好愛となつて、下らない所ばかりに力瘤を入れて、玲瓏玉の如き節義を勵むものはない。残念至極ではありませぬか。

仁俠節義は、それ自身に偉力をもつてをります。松栢の凋
 まないのは、三冬にならなければ分らない。赤穂浪士の節
 義も主家の兇變があつて始めて百世の下に赫々とまば
 ゆい光輝を投げた譯であるが、それが寶の持腐れて、一生
 外面に顯はれずに濟んでも、ちつとも遺憾のことはあり
 ませぬ人たる者は、朝夕仁俠節義の砥石を、決して手元か
 ら離してはなりません。

赤穂浪士の遺物は、芝の高輪萬松山泉岳寺に澤山あり
 まして、其うるはしい節義を偲ぶことが充分に出来ます。
 明治元年に、叡聖文武なる。今上天皇陛下が始めて東
 京へ行幸になり、泉岳寺前を鳳輦、々と御通行の砌、態々

勅使をたてられて

汝良雄等、固く主従の義を執り、仇を復して法に死し
 百世の下人をして感奮興起せしむ。

朕深く嘉賞す。今東京に幸す。因て權辨事藤原獻を遣
 使として、汝等の墓を弔ひ、且金幣を賜ふ

との忝い勅語を戴きました。これによつて、義士の忠節
 は錦上更に花を添へて、萬世の後に輝くこととてありませ
 り。

あゝ萬松山の境内に、いり、義士の墓前に一縷反魂の香
 を焼いて、心靜に松籐をきけば、昔そのまゝの物語を、耳底
 に傳へるよりの氣持のせられるは、われも人もひとしな

みに同じてありませうか。

赤穂義士 (終)

明治四十五年一月五日印刷
明治四十五年一月十五日發行



勅語教訓赤穂義士
定價金二十五錢

著作者 中島喜久平

發行者 鈴木常次郎

發行者 鈴木常松

印刷者 堀越幸

發賣所

東京市神田區今川小路一丁目

修文館

大阪市東區南久太郎三丁目

修文館

東京市神田區錦町二丁目

勉強堂

東京振替貯金口座二六〇番

東京市神田區今川小路一丁目五番地

大阪市東區南久太郎三丁目十五番地

大阪市西區阿波座二番丁一番地

267

496

S